

アジア・アフリカ言語文化研究所

創立30周年

記念要覧

1994

東京外国語大学

CONTENTS

30周年を迎えて	1
30周年を祝う	2
概 要	
A・A研の歩み	7
組 織	9
研究部門構成	10
職 員	12
運営委員・専門委員	14
研 究 活 動	
国際学術交流	16
長期研究者派遣	25
共同研究プロジェクト	26
共同研究員(公募)・大学院・研究生	38
言語文化情報を統合化した辞典・事典編纂	39
言語研修	40
施 設	
電算機室	42
図書室	43
音声学実験室	48
出版物一覧	49
交通案内	59



アジア・アフリカ言語文化研究所

所長 上岡弘二

本年、アジア・アフリカ言語文化研究所は創設30周年を迎えることになりました。私たちの研究所、通称A・A研が、人文科学・社会科学系では、わが国で最初の全国共同利用研究所として、東京外国語大学に設置されたのが、1964（昭和39）年4月1日のことでもあります。

以来、研究所は、鋭意研究部門の整備・拡充に努め、言語を中心とする、現地に即したアジア・アフリカ研究に多大の貢献をしてきました。1978年には早くもメインフレーム・コンピュータ・システムを導入し、アジア・アフリカの諸言語のデータベース化に精力的に取り組んできました。また、アジア・アフリカ研究がますます細分化する現状に鑑み、総合的研究のために、所員が中心になって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトを、最も重要な研究業務のひとつと位置付け、数多くのプロジェクトを組織し、多様な研究成果をあげてきました。

この共同研究プロジェクトの成果報告、アジア・アフリカ諸言語の基礎語彙集、国際学術研究の調査報告、それに、研究所の研究誌『アジア・アフリカ言語文化研究』などを中心に、研究所の出版物はすでに650点を越えています。刊行物が多いことが、必ずしも優れた研究所の指標とはなりません。少なくともわれわれの日頃の研究活動の旺盛さ、A・A研の活力を判断していただく、ひとつの客観的な基準になるとはいえましょう。

さらに、A・A研の重要な任務である、アジア・アフリカの諸言語の教育・訓練に関しては、1994年度実施の3言語を加えて、これまで延べ69言語の言語研修を実施したことになります。言語研修の受講生の中からすでに何人もの優秀な研究者が育っていることは、ご承知の通りです。

また一方では、広く国内外の学界と社会の要請にこたえて、近年のアジア・アフリカ地域の激しい政治的、社会的変動に研究上で即応し、これまでのように文字言語の情報処理だけではなく、アジア・アフリカの言語文化情報の統合化処理を行うべく、研究体制の抜本的な見直しを行ってきました。その結果、1991年には、17小研究部門の体制を、4大研究部門および1外国人客員部門に大きく改組し、ここに次代への発展の基盤が整いました。

現在所員42名、職員26名の態勢で、所員の各個研究と20を越す共同研究プロジェクトを中心に、アジア・アフリカの言語文化の総合的研究に邁進しております。また、大部門改組の翌1992年からは、東京外国語大学に新設された大学院地域文化研究科博士後期課程に全面的に協力することになり、現在は研究活動だけではなく、研究所全体として教育活動にも積極的にその力を注いでいます。

ここに創立30周年を迎え、また、30周年の何年かあとには実現する予定の新キャンパスへの移転を控え、所員・職員一同、今後ますます、わが国におけるアジア・アフリカの言語文化研究の進展にいつそう貢献するとともに、さらに質量ともに高めて国内外の同地域の研究者の研究の便宜を図り、また、社会とアジア・アフリカの現場に研究の成果をより積極的に還元することができるよう、もてる力の限りを尽くす覚悟を新たにしております。

関係各位のいつそうのご鞭撻とご助言を、この機会に改めて、心よりお願いするしだいです。

1994年5月

A・A研創立30周年を祝う

アジア・アフリカ言語文化研究所（わたしたちの間では、省略してA・A研とよんでいるので、以後この略称を用いさせていただくことにする）が、1994年度に創立30周年を迎える。まことに慶賀の至りであり、心からお祝い申しあげたい。

わたしが東京外国語大学ロシア語学科に助教授として奉職した1966年には、A・A研はすでに発足しており、3年目に入るところだった。といっても、わたしはA・A研が本学附置の共同利用研究所であることなどまったく知らず、さほど広くないキャンパス内にどこかよその研究所が同居しているくらいにしか思わなかった。おそらくこれは、現在の学生たちもその程度の認識しか持っていないだろう。だから、教室で学生たちと接していたころ、彼らからしばしば「なぜ、東京外国語大学なのに、山口昌男や川田順造、中沢新一（93年度からほかの大学に移られたが）といった先生の講義がないのですか？」とふしぎそうに質問されたものだった。

A・A研と本学外国語学部との関係が緊密なものになったのは、1992年度に新たに設置された大学院地域文化研究科博士後期課程に対する、A・A研の先生方の全面的なご協力によってである。本学大学院の博士後期課程の設立は、まったくお世辞ぬきで、A・A研の先生方のご協力がなかったら、いまだ実現を見なかったかもしれない。現在、上岡弘二所長をはじめ、永田雄三、家島彦一、中野暁雄、池端雪浦、内藤雅雄、石井溥、梶茂樹、日野舜也といった先生方の講義をおくことによって、本学の大学院博士後期課程は、全国でもきわめて数少ない、というより、おそらく唯一の個性あるものとなり得ていると、心から感謝している。

いまだに欧米研究が主流のわが国にあってA・A研の存在はまことに意義深く、世界的にも貴重である。今後ますますの発展を祈りあげる。

1994年5月

東京外国語大学 学長 原 卓也

A・A研創立30周年を祝して

70年代終りから80年代にかけ、日本学術会議の発展途上国学術交流特別委員会委員長として、アジア・アフリカ言語文化研究所の運営委員をつとめたころ、途上国との学術交流の基礎的研究を進めておられた所員の皆さんから、いろいろ勉強させていただいたことが忘れられません。地球環境を守る「持続可能な開発」の重要性が叫ばれているいま、貴研究所がさらに途上国との学術交流に貢献されるよう期待いたします。

北海道大学・東北大学名誉教授 八木 健三

A・A研は、共同利用の研究所として、わが国のアジア・アフリカ地域の言語・文化研究の進展に大きな役割を果たしてこられました。後に発足した共同利用機関を代表するものとして、その業績に深く敬意を表します。また一時期、委員としてその運営に参画させて頂いたことを感謝し、創立30周年を迎えられたことをお祝い申し上げます。

国立民族学博物館長 佐々木 高明

優秀な研究者各位を擁して、国際的にも評価の高い業績を数多く世に問われている貴研究所が、21世紀を見すえて、さらに多彩な研究計画を推進され、わが国の学術発展に貢献されますよう心から念願致します。

大阪外国語大学長 池田 修

研究所創立30周年を心よりお喜び申し上げます。私が留学から戻ったときに建設中の2号館を目にして驚いたのが昨日のことのようです。人間で言えば三十歳は活力と意欲に満ち溢れた壮年期です。現在も数多く進められているプロジェクトが益々充実し、A・A研究での研究所の主導的役割が不動のものとなる事を確信いたします。

東京外国語大学教授 鈴木 斌

今年が創立30周年のお祝いとなるのご通知を頂き、びっくりしました。ともあれ、おめでとうございます。今となつては、記憶も定かではありませんが、当初は共同利用機関として発足するにしても、東西両外大のいずれに本部を置くかが問題になったことがあったように思います。これにはプラス・マイナスの側面があることが議論されましたが、結局

今の形におさまりました。そんなことを思い出したのは、その後私が大阪外大の学長になって、いろいろ考えさせられるところがあったからですが、その後この研究所がめざましい業績をあげられたことを、心から嬉しく思っています。

大阪外国語大学名誉教授 林 榮一

私はA・A研に関係ある方たちと、アフリカで時々会う機会があった。1967年にセネガルで今西錦司先生や川田順造さんたちと農村に行つて、収穫中の雑穀の種類を特定化する方法を学び、1973年にエチオピアで日野舜也夫妻に会い、研究分野ばかりでなく、夫は酒、妻はたばこ、という、生活にまで分業が成立しているのに感心した。

現地調査に対する研究費に恵まれなかった私から見ると、A・A研には羨ましいものがある。今後ますますの発展を期待する。

作新学院大学教授 矢内原 勝

西欧志向のわが国の伝統的な学問に対して、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化研究の重要性を、重厚な研究成果と、言語の普及活動を通して着実に示し続けられた貴研究所のこれまでのご努力に敬意を表するとともに、このよき伝統が、次の世代によってさらに継承発展されることを期待いたします。

上智大学アジア文化研究所長 石井 米雄

生物の種の絶滅よりも急速に進んでいる言語の絶滅にたいする関心がようやく芽生えてきた今日、われわれの発想の外なる異相の言語が世界にはまだまだ存在していながら、その多くがほとんど記録もないうまま絶滅の危機にあることを思うと、本研究所に

寄せる期待大なるものがあります。

京都大学教授 宮岡 伯人

日本はアジアに位置する国でありながら、その研究機関については、官民両面から見て、まだまだ貧弱と言わざるを得ません。A・A研は、その様な状況下で、わが国唯一の研究機関です。今後の更なる発展拡大が強く希まれます。所長はじめ所員諸兄姉の健闘を心から希望致しています。

東京外国大学名誉教授 小澤 重男

新しく生れようとしている研究所の内容は？ 独立機関か附置か、附置ならどこに？ 研究所の設置場所は？ など、発足を前にして諸々の問題について屢々会議が開かれた頃を懐しく思い返します。あれから早や30年。時の流れの速さに今さら驚かされます。優れた多くの研究を次々に世に出されていることに深甚の敬意を表すると共に、今後益々御発展の程祈り上げます。

東京外国語大学名誉教授 鐘ヶ江 信光

用があつて古い日記をめくっていると、昭和38年7月13日の項に“A・A研言語センター外大附置決定、学長・部長らと懇談会を持つ”と記してある。研究所を持たない東外大が念願叶って一流大学の仲間に入れることとなった。私たち東洋語関係の教官は大いに喜んだ。あれから30年、私は定年退職後もA・A研の紀要や通信を貰っているが、とりわけ通信の表紙の写真（所員撮影）と「民族のこころ」を愛読している。後者は77号で百回を越えたがいつまでも続けて欲しい。

なおこの日の午後教え子の結婚披露宴に招かれた

が、彼も今年結婚30年を迎えたわけである。蛇足ながら今一つこの日は私の44歳の誕生日であった。めでたいことが三つ重なった。

東京外国語大学名誉教授 松山 納

この30年の間にA・A研は国内的にも国際的にもその存在を確実なものにした。喜ばしい限りである。個人による論文やグループによる報告書など多彩な業績の積み重ねができたが、ここでA・A研全員による、あるいは外国の研究者・研究機関も含む壮大なプロジェクトを期待したい。また、専門的な記述・分析を超えて、アジア・アフリカの言語と文化に対する的確な眼を多くの人に与えてほしい。

東京大学名誉教授 柴田 武

本研究所の創立が口の端に掛かり始めた頃のこと。「言語文化」なるものの正体そのほか幾つかの疑点があり、それらについて囂しい議論が交わされ出した。特に私が副会長を努めていた日本歴史学協会の会員からは、それに歴史学部門が含まれるよう努力すべしとの強い要望が寄せられた。私が村川堅太郎会長に従って文部省大学学術局に岡野澄審議官を訪れ、その旨陳情したのはこれに依ってであった。それから鳥兔匆匆30有余年。今や見事な発展を遂げつつある本研究所に足を運ぶたびに、いつもあの頃の記憶が甦ること鮮明である。

東京大学名誉教授 護 雅夫

アジアとアフリカ、これら二つの大陸の現在と未来を想うと、A・A研がになう歴史的使命の重大さを痛感します。21世紀に向けて、さらなるご発展を期待するゆえんです。

大阪外国語大学教授 宮本 正興

私がA・A研に入ったのが1965年2月だから創立以来30年のほとんどの時期を所員として過ごしたことになる。その間、共同利用研究所として国内外に開かれた、自由で何よりも現地調査を重視する研究環境の中で勉強させて頂いたのは本当に幸せだった。この際、改めてA・A研設立に尽力された先生方から心から感謝を捧げたい。

麗澤大学教授 梅田 博之

A・A研が創立30周年を迎えられるとのことで、まことに慶賀の至りである。私は長年共同研究員としてプロジェクトに参加し、また4年間運営委員会の末席にも列なり、何かとお世話になったのであらためて感謝申し上げたい。これまで大きな業績をあげてこられたA・A研が、今後さらに一段と躍進発展されるよう念じてやまないものである。

明治大学名誉教授 神田 信夫

アジア・アフリカ言語文化研究所が創立30周年を迎えられ、心からお祝いとお慶びを申し上げます。東外大在職中に数年間運営委員や共同研究に参加した者として喜びもひとしおです。定期的にお送り下さる『言語文化研究』等により研究員の皆様の御活躍の現状を知り、研究所の今後一層の御発展を祈念しております。

東京外国語大学名誉教授 黒柳 恒男

研究所の創立前、学部との交流が期待され、双方のスタッフが時には職務を交換しては、といった話も出ました。しかし現実には非常勤講師として学部にご出講いただくことも容易ではありません。それでも中国語学科では橋本萬太郎先生に大学院を担当していただきました。今後、学部との交流が一層深まるよう、創立30周年の慶賀とともに希望いたします。

東京外国語大学教授 輿水 優

During its three decades of existence ILCAA has established a glorious tradition of sustained research and academic excellence. As ILCAA enters its fourth decade, I fondly recall my brief but stimulating association with it a decade ago.

D. N. Dhanagare

AA-Ken is the foremost and unique research institute in the world for the study of Asian and African cultures. Its distinguished and innovative faculty has advanced our knowledge of Asia and Africa. I am confident that as the world enters the 21st century AA-ken will continue to make major contributions to our understanding of the Non-Western cultures and civilizations.

P. P. Karan

The warm affection and friendly co-operation, which I received from the staff of the ILCAA, has been a source of strength in my life. The ILCAA has been rendering yeoman's service to Japan and the rest of the world in the area of language, culture and history.

B. B. Rajapurohit

Working in 1991-1992 as a visiting professor at the ILCAA I experienced that it is an extremely efficient institute in the most efficient country of the world. Wonderful colleagues, a well equipped library, perfect technique and a unique scholarly atmosphere make it difficult to wish you more than just a continuation of your impressing scholarly successes for many years to come.

H.-P. Vietze

L'Institut se distingue par l'ampleur de ses objectifs, la qualité de ses recherches, l'utilisation judicieuse de l'informatique et un excellent esprit de collaboration. J'y ai utilisé avec fruit ses publications et je m'y suis enrichi au contact de spécialistes représentant de multiples disciplines scientifiques et régions du monde. Puisse-t-il continuer dans la voie qu'il s'est tracée!

A. Coupez

In my own field of Chinese dialectology, the Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA) has played a key role in the past thirty years.... I am personally grateful for having had the opportunity to work at the Institute for six months in 1991. I wish the Institute many more years of success.

Jerry Norman

ILCAA's computer-science department for the study of languages is one of the most significant in the world. I would like to see the institute very much prosperous in different studies....

B. P. Mallik

祝賀A・A研成立卅周年，希望貴所在今后為亞非各国語言文化学者的學術交流提供更多機會，作出更大貢獻。

照那斯图

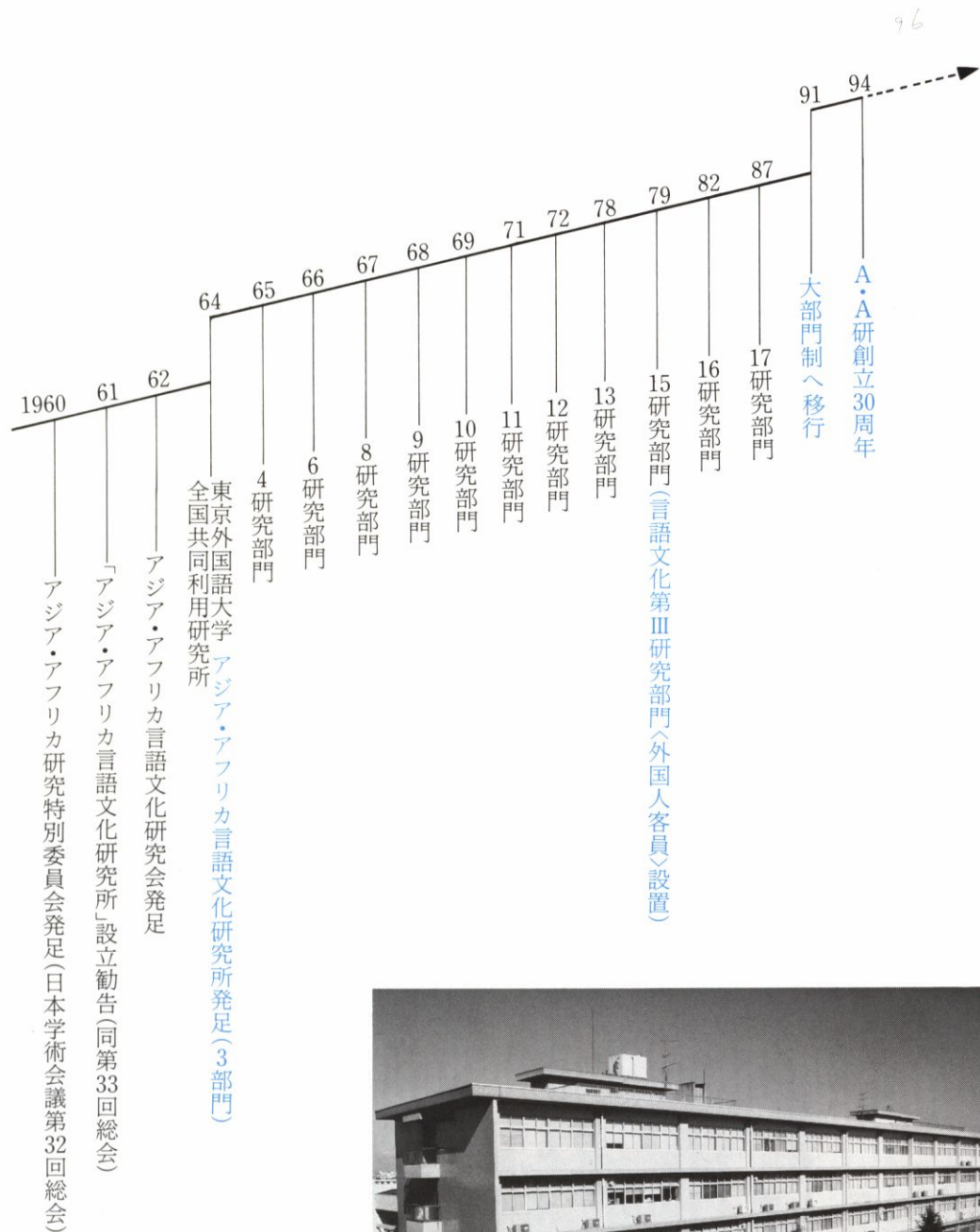
東京外国語大学亞非言語文化研究所成立三十年来，在亞非言語文化研究方面碩果累々，通述學者交流，增進及亞非人民相互了解和友誼。現值貴所成立三十週年之際，我仅代表中国藏学研究中心特致衷心祝賀祝願我們繼續合作。

胡 坦

下記の諸氏から祝辞をいただきましたが、紙面の都合上、割愛せざるを得ませんでした。お詫び申し上げます。

Sechin Jagchid, Adel Abdulsalam, 馬真, 成百仁, 任洪彬, 特布信, Alexis Rygaloff, Lawrence A. Reid, Hwang-Cherng Gong, Lilia F. Antonio, Susie Drost, S. K. Chaudhuri, Wufela Yaek'olingo

A・A研の歩み



(1994年4月撮影)

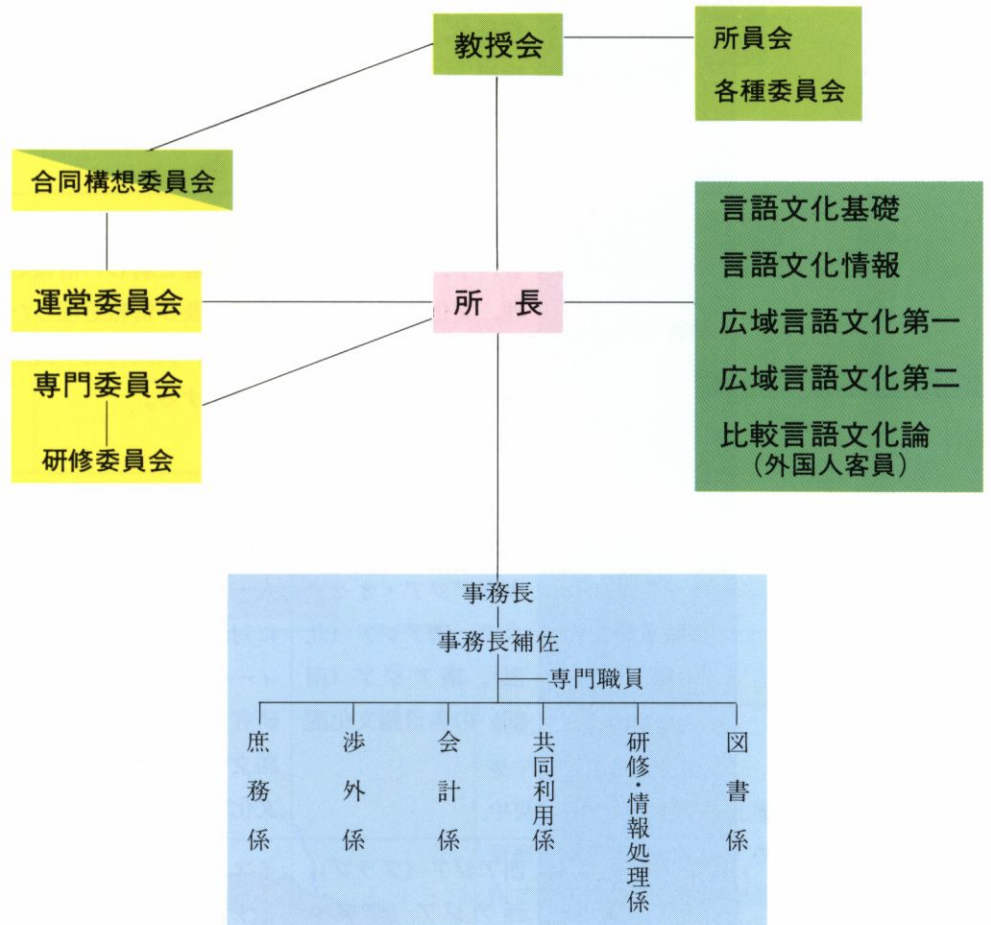
歴 代 所 長

岡 正 雄	1964年～1972年
徳 永 康 元	1972年～1974年
北 村 甫	1974年～1983年
梅 田 博 之	1983年～1989年
山 口 昌 男	1989年～1991年
上 岡 弘 二	1991年～ 現在



A・A 研 究 員 ・ 職 員 一 同 (1993年11月撮影)

組 織



(1994年4月1日現在)

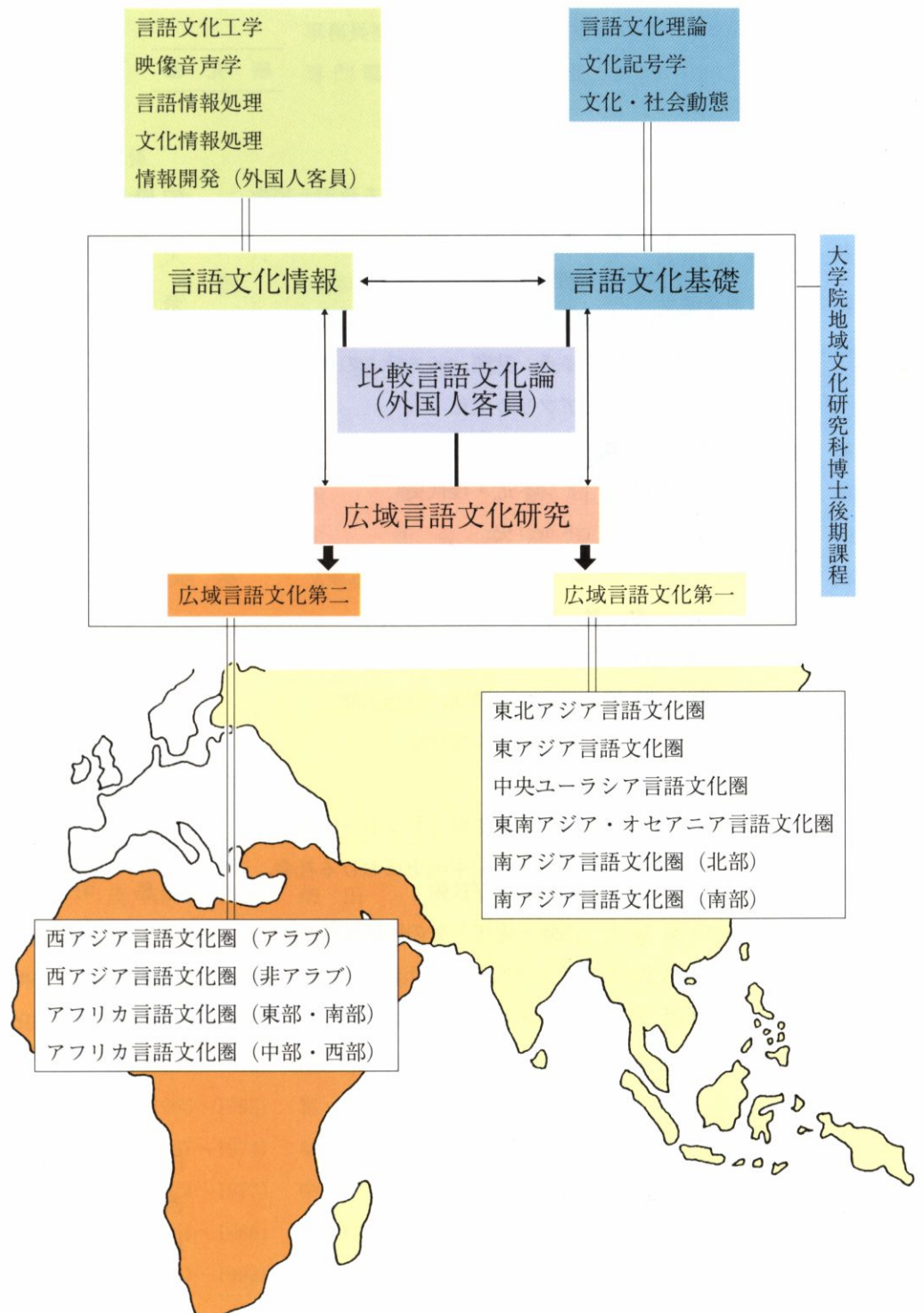
区分	教授	助教授	講師	助手	その他の職員	計
定員	(4) 17	17	0	8	27	(4) 69

()は外国人客員数を外数で示す

研究部門構成

部門名	研究分野	研究内容	所属研究者
言語文化基礎	言語文化理論, 文化記号学, 文化・社会動態	言語文化学の構築を図るためにアジア・アフリカの言語文化を比較・分析し, 歴史学, 文化人類学, 言語学など関連諸研究分野の成果を統合して理論化する。	川田, 松下, 家島 新谷, 水島, 峰岸 田辺
言語文化情報	言語文化工学, 映像音声学, 言語情報処理, 文化情報処理, 情報開発 (外国人客員)	アジア・アフリカの言語文化情報の分析・処理と新しい情報処理システムの構築, 及び情報処理した言語文化情報の提供, 共同利用・公開のための手法を開発する。	加賀谷, 上岡 坂本, 中嶋, 小田 栗原, 深澤, 高島 高知尾, 真島 B. Comrie (外国人研究員)
広域言語文化 第一	東北アジア, 東アジア, 中央ユーラシア, 東南アジア・オセアニア, 南アジア (北部), 南アジア (南部) の各言語文化圏	東は沿海州より西はインド亜大陸まで, およびフィンランドを対象とする。人・物・情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究をおこない, フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。	池端, 石井, 大江 内藤, 奈良 ダニエルス, 中見 町田, 松村, 三尾 宮崎, 森, 新免 西井, 根本
広域言語文化 第二	西アジア (アラブ), 西アジア (非アラブ), アフリカ (東部・南部), アフリカ (西部・中部) の各言語文化圏	イスラム, アフリカ言語文化圏を対象とする。人・物・情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究をおこない, フィールドワークの成果を広域的共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。	永田, 中野, 日野 守野, 梶, 西尾 羽田, 林, 飯塚 黒木
比較言語文化論 (外国人客員)		言語文化学の確立を図るために, 外国人研究者 (特にアジア・アフリカ諸国) を客員教授として招へいし, 共同研究を推進する。	王 輔世 J.L.Diouf D.P.B.Massamba P.Bhaskararao

動態的なアジア・アフリカ言語文化学の構築をめざす研究部門構成図



職 員

所長 (併任) 教授 上 岡 弘 二

研 究 部

教 授

池 端 雪 浦	フィリピン史における政治と宗教	中 嶋 幹 起	漢語・満州トゥングース語
石 井 溥	南アジアの人類学	中 野 暁 雄	アフロ・アジア諸言語およびその民族誌
大 江 孝 男	朝鮮語	奈 良 毅	インド・アールア諸語
加 賀 谷 良 平	音響音声学, アフリカ諸言語	日 野 舜 也	アフリカ都市社会の比較研究
上 岡 弘 二	イラン諸語, イスラムの民間信仰	松 下 周 二	アフリカの言語
川 田 順 造	アフリカ文化	守 野 庸 雄	日本語・スワヒリ語対照研究およびス・ス辞典編纂
坂 本 恭 章	オーストロアジア諸語	家 島 彦 一	インド洋・地中海の海域史に関する基礎的研究
内 藤 雅 雄	インド近・現代史		
永 田 雄 三	トルコ史		

助 教 授

小 田 淳 一	計量文献学	林 徹	トルコ語
梶 茂 樹	バンツー諸語, 言語人類学	深 澤 秀 夫	マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学
栗 原 浩 英	ヴェトナム現代史	町 田 和 彦	ヒンディー語
新 谷 忠 彦	言語哲学	松 村 一 登	フィン・ウゴル諸語
高 島 淳	言語情報処理とヒンドゥー教	三 尾 裕 子	東アジアの人類学
クリスチャン・ダニエルス	16~20世紀中国史における社会, 経済および技術	水 島 司	南インド近・現代史
中 見 立 夫	内陸・東アジアの国際関係史	峰 岸 真 琴	オーストロアジア諸言語
西 尾 哲 夫	アラビア語, アラブ文化	宮 崎 恒 二	オーストロネシア諸社会の研究
羽 田 亨 一	サファビー朝文化史研究	森 幹 男	インドシナ比較文化史

助 手

飯 塚 正 人	イスラム学	田 辺 明 生	南アジアの文化と社会
黒 木 英 充	東アラブ近・現代史	西 井 涼 子	東南アジアのエスニシティ
新 免 康	中央アジア近・現代史	根 本 敬	ビルマ近・現代史
高 知 尾 仁	世界表象と象徴性	真 島 一 郎	西アフリカの人類学

事務部

事務長 安田 隆
 事務長補佐 眞野 初
 専門職員 浅見 義則

庶務係

係長 松本省三
 文部事務官 涌井 隆
 文部事務官 福田 華恵

会計係

係長 田中鉄哉
 文部事務官 大島 俊宏
 文部事務官 古関 英雄
 文部事務官 川崎 勝
 用務員 植田 カツエ

研修・情報処理係

係長 石橋 徳三郎
 主任官 今井 健二
 文部技官
 文部事務官 中嶋 弘子
 文部事務官 山口 登之

渉外係

係長 岡部 久雄
 主任 谷川 かつ子
 文部事務官 吉野 晴美

共同利用係

係長 仲 勝司
 主任 金井 京子
 文部事務官 津田 貞子

図書係

係長 佐藤 剛
 主任 中川 陽子
 主任 須郷 知子
 主任 西浦 数雄
 文部事務官 近藤 晴彦

旧所員 (50音順：在職期間)

飯島 茂 (1970～1988)	柴田 武 (1966～1968)	原 忠彦 (1966～1990)
石垣 幸雄 (1965～1983)	清水 宏祐 (1976～1981)	福井 勝義 (1971～1976)
板垣 雄三 (1966～1972)	辻 伸久 (1975～1988)	間苧谷 栄 (1968～1975)
梅田 博之 (1959～1994)	土田 滋 (1970～1980)	三木 亘 (1972～1985)
岡 正雄 (1964～1972)	徳永康元 (1972～1974)	藪 司郎 (1969～1982)
岡田 英弘 (1966～1993)	富川 盛道 (1964～1986)	山口 昌男 (1965～1994)
辛島 昇 (1967～1974)	中村 平治 (1965～1994)	山本 勇次 (1978～1983)
河部 利夫 (1974～1977)	中沢 新一 (1983～1993)	湯川 恭敏 (1971～1990)
北村 甫 (1964～1986)	永積 昭 (1967～1971)	
栗本 英世 (1987～1992)	橋本 萬太郎 (1970～1987)	

運営委員・専門委員

運営委員

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会においておこなわれますが、共同利用研究所としての本来の機能を適切に遂行するため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針など重要な事項について、所長の諮問に応えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第15期（1993.2～1995.1）の運営委員は以下の通りです。

池端雪浦	所員	祖父江孝男	放送大学教授 (国立民族学博物館名誉教授)
石井 溥	所員	田中二郎	京都大学教授
石井米雄	上智大学教授 (京都大学名誉教授)	谷 泰	京都大学教授
石毛直道	国立民族学博物館教授	土田 滋	東京大学教授
伊谷純一郎	神戸学院大学教授 (京都大学名誉教授)	奈良 毅	所員
應地利明	京都大学教授	西田龍雄	京都大学名誉教授
大河内康憲	大阪外国語大学教授	本田實信	名古屋商科大学教授 (京都大学名誉教授)
北村 甫	麗澤大学教授 (東京外国語大学名誉教授)	宮岡伯人	京都大学教授
古賀正則	明治大学教授	宮本正興	大阪外国語大学教授
興水 優	東京外国語大学教授	矢内原 勝	作新学院大学教授 (慶応義塾大学名誉教授)
斯波義信	国際基督教大学教授	山崎利男	中央大学教授 (東京大学名誉教授)
末成道男	東京大学教授	渡部忠世	放送大学教授 (京都大学名誉教授)
鈴木 斌	東京外国語大学教授		

専門委員

所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会があり、委員は所外の学識経験者の方々に委嘱されます。1993年度の委員は以下の通りです。

研修委員会

大河内康憲，大東百合子（明海大学学長），小澤重男（東京外国語大学名誉教授），北村甫，興水優，柴田紀男（天理大学教授），鈴木斌，土田滋，西田龍雄，宮本正興

浅井 恵 倫	荒 松 雄	飯 島 茂	池 田 修
石 垣 幸 雄	石 川 榮 吉	石 館 守 三	泉 井 久之助
板 垣 與 一	伊地智 善 継	一 又 正 雄	伊 藤 徹
井 上 和 子	今 西 錦 司	梅 田 博 之	大 江 孝 男
岡 田 英 弘	小 澤 重 男	貝 塚 茂 樹	鐘ヶ江 信 光
金 子 二 郎	河 部 利 夫	神 田 信 夫	黒 柳 恒 男
桑 原 武 夫	小 泉 文 夫	江 実	河 野 六 郎
小 堀 巖	坂 本 是 忠	佐々木 高 明	柴 田 武
鈴 木 尚	田 町 常 夫	土 井 久 弥	徳 永 康 元
富 川 盛 道	富 田 竹二郎	長 島 信 弘	中 西 龍 雄
中 根 千 枝	中 村 平 治	服 部 四 郎	林 榮 一
原 忠 彦	伴 康 哉	坂 野 正 高	藤 枝 晃
古 野 清 人	前 嶋 信 次	松 田 寿 男	松 本 信 廣
松 山 納	三 根 谷 徹	護 雅 夫	八 木 健 三
山 口 昌 男	山 田 信 夫	山 田 善 郎	山 本 達 郎
山 本 登	渡 辺 武 男	渡 辺 光	



猫の写真を撮っていたら、娘さんが自分と友達を撮れと。娘さんを撮っていたら、今度はお母さんが出てきて一緒に撮れという。体型から明らかなように、左の二人が親子。下町ではこんな堂々たる女性によく出会う。(上岡弘二：1990年冬、アンカラのKaleにて)

国際学術交流

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査をおこなうことを重要な研究の課題の一つにしています。これまでに文部省科学研究費で、本研究所員が組織した海外学術調査は以下のとおりです。

海外学術調査

- (1) アフリカ部族社会の比較調査
1969年, 1971年(富川盛道), 1974年, 1976年(日野舜也)
- (2) ヨーロッパ東南部農村調査
1970年(岡 正雄)
- (3) 東南アジア・ナショナリズムの形成過程における地域社会の変動
1972年(河部利夫)
- (4) イスラム圏社会・文化変容の比較調査
1974年, 1977年, 1980年(三木 亘)
- (5) 中国・インド文明接触地帯における自然, 生態と文化に関する調査
1975年(飯島 茂)
- (6) 南アジア河川流域米作地帯の農村社会の研究
1979年, 1981年, 1983年, 1985年(原 忠彦)
- (7) ネパールにおける国民形成過程の人類学的言語学的調査
——ガンダキ水系諸地域住民のネパール化に関する比較研究調査——
1980年, 1982年, 1984年(北村 甫)
- (8) スーダン・サーヘル地帯における移住と地域形成の調査研究
——ハウサ・フラニ語圏を中心に——
1981年, 1982年, 1984年(富川盛道)
- (9) 環カリブ海域における複合文化の比較研究
——アフリカ・アジア系社会・文化空間の変動過程——
1982年, 1983年, 1985年(山口昌男)
- (10) アラビア海・東地中海交流圏におけるイスラム基層文化の調査研究
1983年, 1984年(三木 亘), 1986年(上岡弘二)
- (11) バンツー諸語の調査・分析と比較研究
1984年, 1985年, 1987年(湯川恭敏)
- (12) ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究
1986年, 1988年, 1990年, 1992年, 1993年(川田順造)
- (13) アフリカにおける都市化の総合比較調査
1986年, 1987年(日野舜也)

- (14) 南アジア諸言語の調査研究とそのデータベースの作成
1987年, 1988年, 1989年 (奈良 毅)

国際学術研究

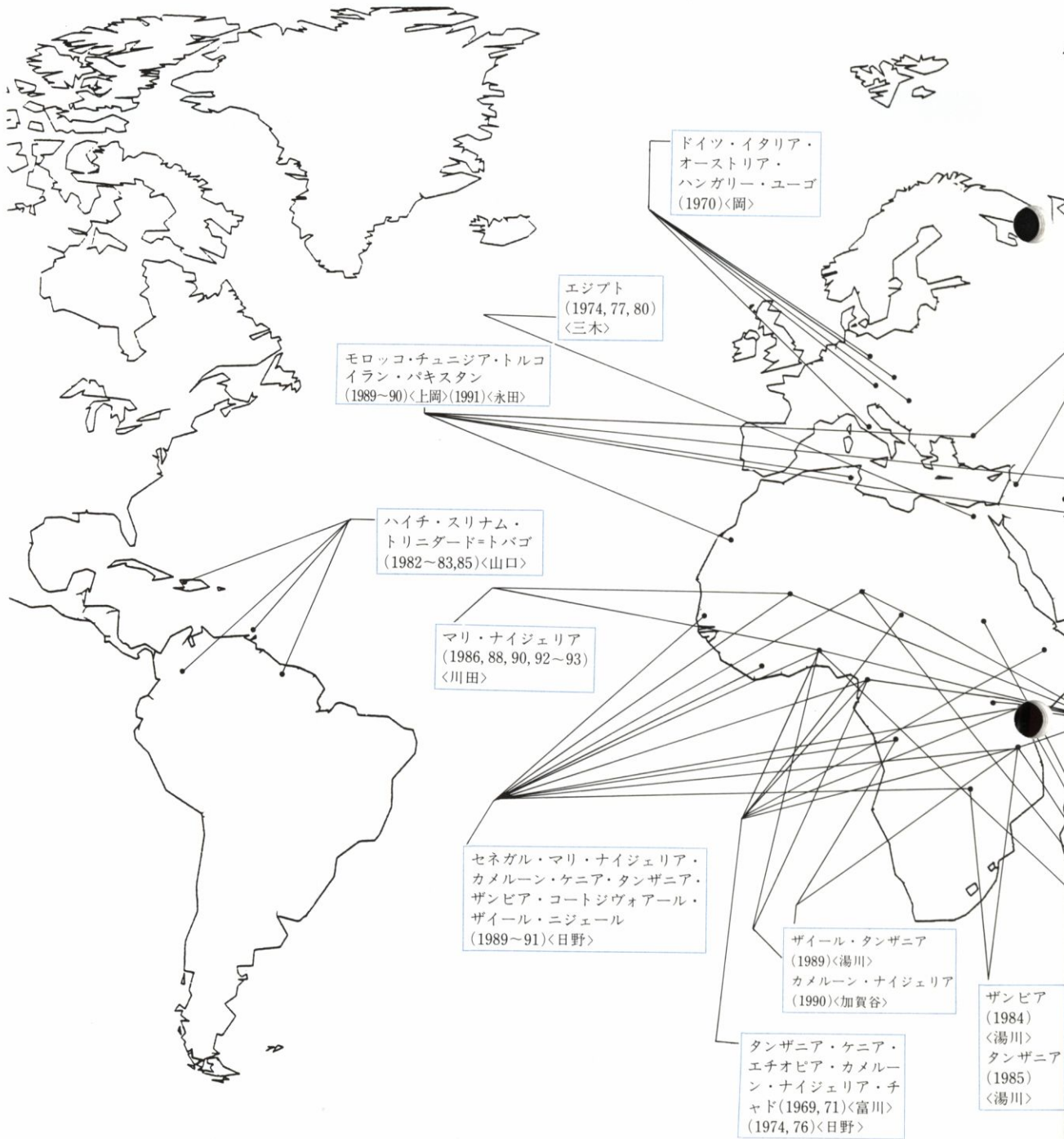
- (15) アフリカにおける都市化の比較調査—とくに, 地域形成・国民社会形成との係わりにおいて—
1989年, 1990年, 1991年 (日野舜也)
- (16) イスラム圏における市の比較研究—異文化接触のメカニズム—
1989年, 1990年 (上岡弘二), 1991年 (永田雄三)
- (17) バンツー諸語と若干の隣接諸語の記述・比較研究
1989年 (湯川恭敏), 1990年 (加賀谷良平)
- (18) 中国周辺部における言語接触と社会文化変容—漢族文化と非漢族文化との相互関係—
1990年, 1991年, 1992年 (中嶋幹起)
- (19) 電算機補助による南アジア諸言語の研究
1991年, 1992年 (奈良 毅)
- (20) 多民族国家マレーシアにおける「共同体」の総合的研究
1991年, 1992年 (宮崎恒二)
- (21) アフリカにおける伝統都市の社会変化の比較調査
1993年 (日野舜也)
- (22) 電算機補助による南アジア諸言語の比較・対照研究
1993年 (奈良 毅)

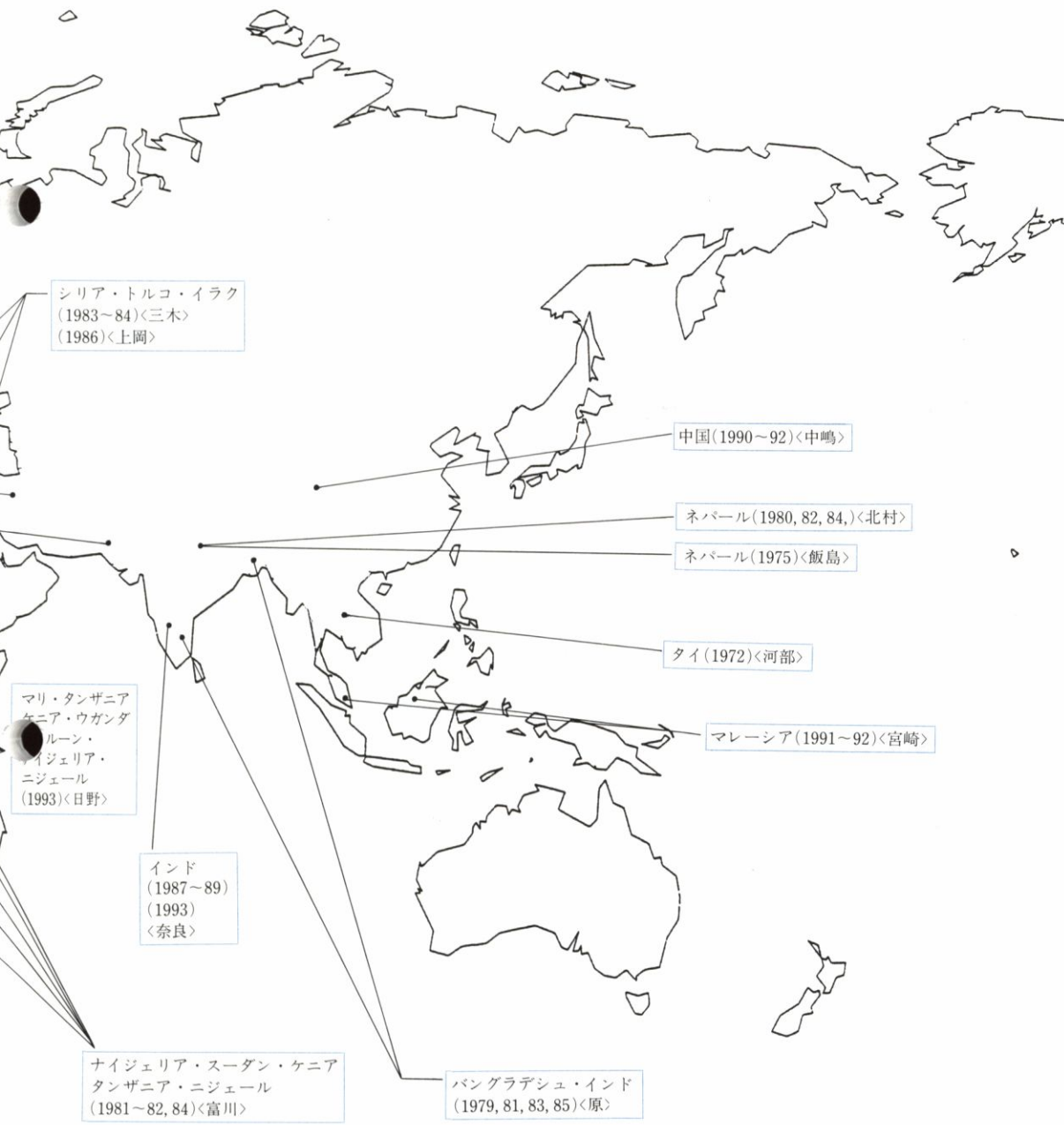
なお, このほか各種財団の助成金による海外学術調査も組織されています。「海上ルートを通じての東西の文化的・経済的交流—インド洋周辺の港市遺跡の調査—」(研究代表者・家島彦一, 1984-85), 「フィリピン・フォークカトリシズムの歴史人類学的研究」(研究代表者・池端雪浦, 1984-87) などがその一部です。

「国際学術研究に関する総合調査研究」(通称「国際学術研究総括班」)の活動

このほかに文部省科学研究費補助金(国際学術研究)を受け1974年から設けられている「総括班」は, 1983年からその事務局をアジア・アフリカ言語文化研究所におき, 1986年からは本研究所所長を代表者として活動を続けています。この総括班は他の様々な機関に所属する研究者によって組織され, 本研究所に事務所をおいて, 科学研究費(国際学術研究)にかかわる研究者・研究組織相互間, および研究者側と文部省の間の情報交換, 連絡調整などの活動をおこなっています。活動の主なものとしては, 科学研究費(国際学術研究)で海外に派遣される研究組織の代表者を集めて情報交換をおこなう「研究連絡会」の開催, 国際情勢に即応した研究調査を可能にするための「学術研究体制調査のための海外派遣」, および『海外学術調査ニュースレター』(年3回)等の出版があります。

海外学術調査





外国研究機関との共同研究

本研究所は、かねてより海外の研究機関と研究資料・情報の交換、研究員の相互交流、共同研究調査の実施等を通じ学問上の国際協力を進めてきましたが、最近はさらにこれらの機関のいくつかと正式に学術協定を結び、国際協力の一層の充実をはかろうとしています。

これまでに学術協定を結んだ研究機関名と締結年および共同で実施した事業等は、以下の通りです。

外国機関名 (略号)	締結年	国名
国立科学技術研究機構 (ONAREST)	1978年	カメルーン

(のち高等教育・情報科学・科学研究省 (MESIRES)に改称)

1969年から1976年の文部省科学研究費補助金による現地調査「アフリカ部族社会の比較調査」(研究代表者・富川盛道教授)におけるカメルーンとの共同研究にさいして、双方において、研究協力協定の必要性が認識され、1978年9月、カメルーン国立科学技術研究機構の人文科学研究所所長、Samuel Ndoumbe-Manga氏をまねき、本研究所において協定が締結された。

協定締結後の共同研究、所員の現地における共同研究 (1980-81, 82, 83, 86) : カメルーン研究者の現地調査参加 (1982, 84, 86, 87, 89, 90, 91) : 本研究所におけるカメルーン研究者の成果刊行、単行本9冊 (*African Languages and Ethnography* シリーズ), 論文2点 (*Sudan Sahel Studies*)。

インド諸語中央研究所 (CIIL)	1987年	インド
--------------------------	-------	-----

CIIL所長本研究所訪問 (1983), 副所長来訪 (1985), 所員来所, 共同研究 (1984-85, 1991-92) : 本研究所所員CIIL訪問 (1982, 87, 88, 89, 91, 92) : 共同研究プロジェクト「南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成」を実施, 共同研究年次報告書発行 (1990, 91, 92)。

インド統計研究所 (ISI)	1987年	インド
-----------------------	-------	-----

ISI特別客員研究員本研究所来所, 共同研究 (1985-86), 経済研究部長来訪 (1988) : 本研究所所員ISI訪問 (1987, 88, 89, 90, 91) : 共同研究プロジェクト「電算機補助によるラビンドラナート・タゴールの言語の分析的研究」を実施中 (1987-) : 電算資料シリーズ3冊発行 (1987, 88, 90)。

チベット言語文化研究所 (LCAT)	1988年	フランス
---------------------------	-------	------

敦煌の古代チベット語文献のデータベース化をおこなっているが、その一部のKWIC索引は、*Choix de Documents Tibétains à la Bibliothèque Nationale III Corpus Syllabique*として、フランス国立図書館から1990年に出版された。

人文科学研究所 (ISH)	1990年	マリ
----------------------	-------	----

文部省科学研究費補助金による現地調査「ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究」を継続的に実施し、その成果を*Boucle de Niger: Approches multidisciplinaires* Vol.1. (1988), Vol.2. (1990), Vol.3. (1992) Vol.4. (1994) として刊行した。

外国人研究者の招聘

本研究所は、国際的な学術交流・共同研究を推進するために、外国からアジア・アフリカの言語文化の専門家を外国人研究者として受け入れ、研究の便宜を供与しています。比較言語文化論研究部門ならびに言語文化情報研究部門の情報開発分野は、外国人研究者を客員として受け入れるためのポストです。このほか日本学術振興会や国際交流基金の招聘計画などで来日する外国人研究者を、随時受け入れています。

1967	Gordon T. Bowles	アメリカ	人類学
1968	Muhammad Ahmad Anis	エジプト	近代史
1973	Ra'ūf Abbās Hāmid	エジプト	近代史
	Yellava Subbarayalu	インド	南インド中世史
1975	Fe Aldave-Yap	フィリピン	フィリピン国語学
1976	金 完 鎮	大韓民国	韓国語学
	Curtis D. McFarland	アメリカ	言語学
	'Abd al-'Rahīm Abd al-Rahmān	エジプト	中東近代経済史, アラビア語学
	Salim Abdulla Wazir	タンザニア	教育学
	Bhakti Prasad Mallik	インド	言語学
	Karthigesu Indrapala	スリランカ	歴史学
1977	俞 昌 均	大韓民国	韓国語学
1988	Søren C. Egerod	デンマーク	東洋言語学, 古典学
	Bozkurt Güvenç	トルコ	社会人類学
	Thubten Jigme Norbu	アメリカ	チベット学
	André-Georges Haudricourt	フランス	言語学, 植物学, 民族学
	Maria Lourdes S. Bautista	フィリピン	言語学
1979	William S-Y. Wang	アメリカ	言語学, 音声学, 神経言語学
	Alhaji Faruk Gezawa	ナリジェリア	ハウサ語学
	Shyamsunder Joshi	インド	ヒンディー文学
	Dor Bahadur Bista	ネパール	社会人類学
	Jean-Baptiste Bunkungu	オートボルタ	モシ語学
	Paul M. Thompson	アメリカ	中国哲学, 中国文学
	Chandra Mudaliar	インド	国際関係論, 政治学
	Curtis D. McFarland	アメリカ	言語学
	Udom Warotamasikkhadit	タイ	言語学
1980	Thomas Sebeok	アメリカ	言語学, 記号学
	傅 懋 勤	中国	言語学, 記号学
	Samuel H. Elbert	アメリカ	ポリネシア諸語

	Kripal C. Yadav	インド	歴史学
	Bozkurt Güvenç	トルコ	社会人類学
	Alain Peyraube	フランス	中国言語学
1981	徐 在克	大韓民国	韓国語学
	Muhammad B. Mkelle	タンザニア	スワヒリ語学
	Maurice Coyaud	フランス	中国言語学
	William O. Beeman	アメリカ	人類学
	Marie-Claude Paris	フランス	中国言語学
	Talat Tekin	トルコ	古代トルコ語
	P.A. Narasimha Murthy	インド	政治学, 国際関係論
	Yoshiro Imaeda	フランス	チベット学
	Ernesto Constantino	フィリピン	フィリピン言語学
1982	Suresh Awasthi	インド	民俗演劇
	Salah A. al-'Arabī	エジプト	アラビア語視聴覚教育学
	Kiruja Ruchiami	ケニア	アフリカ事情
	Mohammadou Aliou	カメルーン	フラ言語学
	John G. Hangin	アメリカ	モンゴル言語学
	Isidore Dyen	アメリカ	オーストロネシア比較言語学
	Suriya Ratanakul	タイ	東南アジア諸言語, 言語学
	Tuncer Baykara	トルコ	歴史学
	Kanchana Ngourngsi	タイ	言語学
1983	Elmar A. Holenstein	スイス	普遍人類学
	Dor Bahadur Bista	ネパール	社会人類学
	南 豊鉉	大韓民国	韓国語学
	Alexis Rygaloff	フランス	中国言語学, 東アジア言語学
	'Ādil 'Abd al-Salām	シリア	自然地理学, チェルケス語
	Sechin Jagchid	アメリカ	モンゴル史
	Santasilan Kadirgamar	スリランカ	国際関係論
1984	Lilia F. Antonio	フィリピン	フィリピン, フィリピン翻訳学
	Rajagopalan Venkataratnam	インド	医療社会学
	Dattatreya N. Dhanagare	インド	社会学
	朴 熙泰	大韓民国	日本語学
	Ram Adhar Singh	インド	言語学
	Barbara N. Aziz	アメリカ	社会人類学
	Guillermo E. Quartucci	メキシコ	日本文学

1985	黄 国营 Pradyumna P. Karan 馬 真 Metin And 韓 美卿 Bhakti Prasad Mallik Daw Mya Mya	中華人民共和国 アメリカ 中華人民共和国 トルコ 大韓民国 インド ビルマ	言語学 人文地理学 中国言語学 演劇学 日本語学 言語学 歴史学
1986	Shanmugam Pillai Subbiah Ahmet Mete Tuncoku James Francis Downs 李 榮	インド トルコ アメリカ 中華人民共和国	農村地理学, 社会地理学 国際関係論 文化人類学 中国音韻論, 方言学
1987	賀 巍 Kyaw Win Virgilio G. Enriquez Saroj K. Chaudhuri John H. Fincher	中華人民共和国 ビルマ フィリピン インド アメリカ	中国方言学 歴史学 社会心理学, 言語心理学 日本語, 日本文化 中国現代史
1988	Urmila Phadnis 特 布信 侯 精一 Nasrin F. Hakami	インド 中華人民共和国 中華人民共和国 イラン	国際関係論 歴史学 中国方言学 社会学
1989	Lilia F. Antonio 照那斯图 任 洪彬 Ra'ūf 'Abbās Hāmid 胡 坦 王 鐘翰 Frank M. Heidemann	フィリピン 中華人民共和国 大韓民国 エジプト 中華人民共和国 中華人民共和国 西ドイツ	フィリピン, フィリピン翻訳学 モンゴル言語学 韓国語学 近代史 シナ・チベット言語学 歴史学 民族学, 社会学
1990	成 百仁 Mohammad-Reza Nasiri	大韓民国 イラン	満州語学 歴史学
1991	Jerry Norman Patrizia Violi Talat Tekin Toomas Help Nasrin F. Hakami David P. B. Massamba	アメリカ合衆国 イタリア トルコ エストニア イラン タンザニア	中国語学 記号学 古代トルコ語学 エストニア語学 社会学 スワヒリ語学

	Lawrence A. Reid	アメリカ合衆国	オセアニア語学・歴史学
	Hans-Peter Vietze	ドイツ	モンゴル語学
	Wufela Yaek'olingo	ザイール	口承文芸学
	龔 煌城	台湾	西夏語学
	Bando Bhimaji Rajapurohit	インド	言語学, 音声学
	Gregory O. Nwoye	ナイジェリア	言語学
	Ungku Maimunah M. Tahir	マレーシア	文学
	Nai Pan Hla	ミャンマー	モン語学
1992	Pradyumna P. Karan	アメリカ合衆国	人文地理学
	Ruth M. Beshà	タンザニア	言語学
	林 美容	台湾	文化人類学
	André Coupez	ベルギー	比較言語学, 口承文芸学
	Mücteba İlgürel	トルコ	歴史学
	Nai Pan Hla	ミャンマー	モン語学
	Aregay Wolde Merid	エチオピア	歴史学
	Bira Shagdaryn	モンゴル	歴史学, 文献学
	朴 熙泰	大韓民国	日本語学
	Frederik Kortlandt	オランダ	言語学
	Emma Hartinell Gifre	スペイン	スペイン語学
1993	王 輔世	中国	言語学
	Jean Léopold Diouf	セネガル	言語学
	David P. B. Massamba	タンザニア	スワヒリ語学, 比較バンツール言語学
	Peri Bhaskararao	インド	言語学, 音声学
	Nai Pan Hla	ミャンマー	モン語学
	Bernard Comrie	イギリス	言語学
	Lydia N. Yu-Jose	フィリピン	国際関係論
	Victoria A. Temu	タンザニア	芸術学
	金 昌南	中国	日本語学
1994	M.G.S. Narayanan,	インド	歴史学
	Chob Kacha-ananda	タイ	文化人類学, 民族学 (タイの山地民族, 特にヤオ族について)
	Daniel Joseph Mkude	タンザニア	言語学 (一般言語学, スワヒリ語学)
	Bando Bhimaji Rajapurohit	インド	言語学, 音声学
	Ram Adhar Singh	インド	比較言語学 (インド・アールリア諸語) 辞書編纂学
	Lydia N. Yu-Jose	フィリピン	国際関係論
	Askari Pashai	イラン	政治学, 教育学

長期研究者派遣

アジア・アフリカの言語文化の研究にとって、各地域で話されているさまざまな言語の修得が必須であることは言うまでもありません。本研究所では助手等の若い研究者をそれぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に派遣しています。この現地投入は、言語を自由に話し、あるいは読み、書く能力を獲得するだけでなく、長期間現地の生活にとけこむことによって、その地域の文化や歴史の研究に対する幅広い視点を身につけることを目的としています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計28名が派遣されました。

1967年－1969年 石垣幸雄（エチオピア）、守野庸雄（タンザニア）

1969年－1971年 松下周二（ナイジェリア）、家島彦一（アラブ連合）

1971年－1973年 内藤雅雄（インド）、中野暁雄（モロッコ、南イエメン）

1973年－1975年 福井勝義（ソマリア）、中嶋幹起（香港）

1975年－1977年 加賀谷良平（ボツワナ）、湯川恭敏（タンザニア、ザイール）

1977年－1979年 石井 溥（ネパール）、藪 司郎（ビルマ）

1979年－1981年 羽田亨一（イラン、トルコ）、清水宏祐（アラブ連合、イラン、トルコ）

1981年－1983年 山本勇次（ネパール）、新谷忠彦（ニューカレドニア）

1983年－1985年 辻 伸久（中国、香港）、水島 司（インド）

1985年－1987年 中見立夫（中国、モンゴル）、梶 茂樹（ザイール、ケニア、ザンビア）

1987年－1989年 松村一登（フィンランド、ソ連）、宮崎恒二（オランダ、インドネシア）

1989年－1991年 林 徹（中国、トルコ）、栗本英世（エチオピア、ケニア）

1991年－1993年 栗原浩英（ベトナム、ロシア）、峰岸真琴（インド）

1993年－1995年 新免 康（中国、ロシア共同体、イギリス）、根本 敬（イギリス、タイ）

ダン族の男子結社で重要な役職にある長老が亡くなった。その葬儀に際し、彼の妻の出身村からかけつけた精霊ヴァブス。額、鼻梁、眼窩、唇のフォルムを自在に強調した木彫面の表面に黒色の植物性顔料を下塗り、目穴の周囲と歯の部分に金属片を当て、部分的に赤褐色の樹皮粉もまぶした制作様式の仮面。背後の男たちは、精霊の舞踊に不可欠な合唱隊の構成員。（真島一郎：1989年、コートディヴォワール共和国、ダナネ県）



共同研究プロジェクト

共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。これまで数多くのプロジェクトが組織され、多様な研究成果をあげてきました。（プロジェクト出版物については共同研究プロジェクト報告52頁以下参照）

本年度のプロジェクト名と各プロジェクトの研究代表者・共同研究員は次のとおりです。

言語文化基礎部門

多民族国家における異化・同化形態の比較研究（宮崎 恒二）（所員 2 名，共同研究員10名）

社会や文化が静的な存在ではなく、他者との接触を経て現在に至っていたのだと認識しますと、文化・社会の動的把握は派生的な応用課題ではなく、一般理論を提供する基礎的分野として位置づけられることになります。本プロジェクトの目的は、そのような動態的研究における一つの試みとして、多民族国家における異化と同化の形態を明らかにすることにあります。各々異なる専門領域に属する研究者を組織し、特定地域を集中的に研究することにより、異質な諸文化の接触によってもたらされる各文化自体の変容形態と接触の結果、新たに生成されてくる文化形態に着目し、各文化の特性のみならず、異化および同化の諸過程を明かにします。そしてそれらの作業を通じて、異文化接触の一般理論を見出し、社会・文化動態研究に貢献したいと考えます。

穴沢 眞	辛島 昇	黒田景子	桑原季雄	茱口善美
佐藤哲夫	富沢寿勇	中澤政樹	永田淳嗣	野村 亨

チングリプットの総合的研究（水島 司）（所員 3 名，共同研究員 5 名）

本プロジェクトは、南インドのチングリプット地域を対象に、紀元前から今日に至る時代を多角的に研究するものです。チングリプットは、海外交易や植民地経営の拠点であったマドラスや、大宗教センターであるカーンチープラム等、南インドの歴史的展開の中で極めて重要な位置を占めてきた都市を含む地域です。同地域に関しては、古代・中世に関する建築物や碑文が残されているだけでなく、17世紀以降のイギリスのインド進出にともなって、極めて多くの資料が残されています。そして、それらに関して歴史学、宗教学、文化人類学、経済学、文学をそれぞれ専門とする南インドの専門家が、従来個別的に研究を進めてきており、共同研究の基盤が出来上がりつつあります。本プロジェクトでは、これらの研究者が協力し、チングリプットという極めて限定された空間を対象にして、古代から現代にいたる歴史的变化を総合的に解明することを目的としています。

研究期間はさしあたり 4 年とし、はじめの 2 年間は国内で討議を重ね、3 年目からは現地調査を予定しています。

粟屋利江	辛島 昇	重松伸司	高橋孝信	柳沢 悠
------	------	------	------	------

音・図像・身体による表象の通文化的研究 (川田順造) (所員 5名, 共同研究員 22名)

この学際的共同研究では、音 (音声言語を含む)、図像 (文字を含む)、身体による表象を、相互に関連させてとりあげ、通文化的な視野で検討します。これらの総合されたものとしての映画・演劇も対象とします。異質な媒体による表象をあえて関連させ、対比することによって、それぞれのうちに、あるいは全体の中に、隠れていた特質や問題を発見してゆきます。

第1年度目は、基本的な問題の設定、音・図像・身体それぞれを媒体とする表象の事例研究を通して問題の検討を行いました。第2年度目は、より抽象度を高め、異なる媒体の表象を関連・対比させてとりあげ、「表象」という概念についても学際的な視野で再考します。

市川光雄	應地利明	大森康宏	加藤千代	吉川周平
小松和彦	佐藤深雪	卜田隆嗣	菅原和孝	塚田健一
鶴岡真弓	出口 顕	友枝啓泰	野村雅一	坂東八十助
藤田隆則	堀内 勝	森山 工	山口 修	山下洋輔
山本順人	吉田憲司			

アジア・アフリカ諸言語の総合研究 (加賀谷良平) (所員16名, 共同研究員56名)

このプロジェクトはアジア・アフリカ諸言語研究の最も基礎的な総合プロジェクトです。その主たる目的は、フィールドワークによって得た資料を、諸研究者による多角的分析・資料統合 (同系統言語間での比較・異系統言語間での対照) を通じて、主として欧米の言語を基にして構築されてきた言語理論をアジア・アフリカの諸言語から見直し、新たな言語理論を構築することにあります。またそれらの膨大な言語資料を、コンピューターを始めとする様々な情報機器を用いて分類・分析する方法の開発もその目的とします。

このプロジェクトは、文法部会、音韻部会、語彙部会の3部会から構成されています。各部会毎に、その研究の基礎となるフィールドワーク等によって得られたアジア・アフリカ諸言語の資料分析や比較、またその構造の解明、さらにその情報化のための会合を開き、研究発表と討議を行います。

石山伸朗	伊豆山敦子	岩田 礼	内田紀彦	上野善道
大島 稔	小田真弘	菊澤律子	岸田泰浩	木下宗篤
金 東俊	切替英雄	久保智之	窪園晴夫	熊本 裕
近藤達夫	坂本比奈子	崎山 理	柴田紀男	柴谷方良
清水克正	杉田 洋	杉藤美代子	副島昭夫	高階美行
高橋慶治	田窪行則	田口善久	田村すず子	檀辻正剛
月田尚美	土田 滋	角田太作	富田健次	中井幸比古
中川 裕	中島 久	縄田鉄男	新田哲夫	橋本 勝
早田輝洋	原 誠	稗田 乃	福井 玲	福田権一
福原信義	益子幸江	水野正規	溝上富夫	宮岡伯人
村崎恭子	森口恒一	藪 司郎	山田幸宏	湯川恭敏
吉川 守				

言語文化情報部門

言語研修（中嶋幹起）（所員17名，共同研究員5名）（40，41頁参照）

言語研修委員会は，その分野に精通する研究者によって構成され，アジア・アフリカの言語に習熟し，实际的に役立つ能力を高める最も効果的な方法を検討することを目指しています。短期集中言語研修の目標は，

- 1) 口語及び書き言葉の能力をつける。
- 2) 言語の科学的研究と実際の応用の訓練の提供。
- 3) 大学院相当の学生に野外調査を実施するための手段としての言語習得の援助。

専門委員会が年2回，専門委員・共同研究員合同会議が年1回開催され，研修言語の選定，教授法，開催時期・期間，実施方法，評価等について討論します。

大坪一夫 大澤 孝 勝田 茂 森安孝夫 吉川武時

自動化研修<CAIプログラム>開発とハイパーテキスト化研究（林 徹）

（所員13名，共同研究員6名）

アジア・アフリカで話されている言語の大部分は，残念ながら「特殊な」言語と見なされ，極めて限られた学習の機会しかないのが現状です。しかし，これらの言語に対し緊急かつ切実な必要性をもつ人の数は，年々増加する傾向にあります。

本プロジェクトは，こうした需要に迅速に対応するための，コンピュータを用いた自動言語研修システム及び言語研修支援システムの作成・運用を目指すものです。これまで研究所に蓄積された言語・非言語データを自動化研修に利用・活用する方法（ハイパーテキスト化）を探ることも重要なテーマとなります。

昭和63年度から平成4年度までの科学研究費補助金による研究（朝鮮語，タイ語，カンボジア語の自動化研修システムを試作）と連動しつつ，これまで，自動化研修の方法論的・技術的議論を重ねてきました。本年度も，実際にシステムの製作を行う科学研究費補助金による研究（申請中）と密接な関係を持ちながら，自動化研修システムの，より現実的かつ実用的な運用を前提とした研究・議論を，以下に示す計画に従って進める予定です。

1. CAIシステム構築を行うハード・ウェアの構成を検討するための研究会（東京：7月）
2. これまでの議論を踏まえ，CAIシステムの対象言語および研修事項の検討のための研究会（東京：9月）
3. 映像資料（スライド，図版など）や音声資料などCAIシステム構築に用いられる教材の整理・利用の手法に関する研究会（東京：11月）
4. CAIシステム（試作版）の製作（科学研究費による研究：11月～1月）
5. CAIシステム（試作版）の評価に関する研究会（東京：2月）

これまでの研究は，ともするとハード・ウェアのパフォーマンス不足，操作性の悪さ，さらには基

本ソフト・ウェアの一貫性欠如などに足を引っ張られ、それぞれの時点での可能な方法を模索することに、悪戦苦闘してきたといえます。しかし幸いにも、近年のソフト・ハード両面の進歩、特に画像、音声など非文字情報を扱う技術の飛躍的な向上により、これまでのような技術的環境との格闘、妥協の必要性が次第に少なくなりつつあります。本年度のプロジェクトでは、これまでの研究成果の上に立ち、実用的な自動化研修システムの製作・運用への第1歩を踏み出したいと考えています。

岩居弘樹 大坪一夫 西村よしみ 益子幸江 吉川武時
A・ヘンドリッヒ

辞典編纂プロジェクト（小田淳一）（所員9名，共同研究員17名）

アジア・アフリカ諸言語の言語資料を収集して計算処理を行い、それに音韻論的、形態論的、統辞論的分析を施して、これらの言語の辞典編纂に備えると共に、処理過程で得られた機械可読形式の索引を形成します。

遠藤由里子 鶴殿倫次 太田 斎 大塚秀明 大橋由美
落合守和 小野 基 北村 甫 慶谷壽信 佐々木猛
佐藤 進 武内紹人 豊島正之 中村雅之 花登正宏
平田昌司 宮脇淳子

ワールド・ミュージックの通文化的研究（梶 茂樹）（所員5名，共同研究員10名）

現在、世界の様々な地域で、その地域に発したポップス（歌謡曲）が展開していますが、それは今や国境を越え、世界化しようという勢いです。今まで非欧米系の音楽を研究する学問分野として民族音楽学がありましたが、これは主として一定地域の伝統音楽を対象とするのみで、その地域の音楽をトータルに示してこなかったきらいがあります。本研究では、現在アジア・アフリカ地域に展開する様々な歌謡曲を、伝統音楽とのつながりをふまえつつも、特にその都市性との関連でとらえ、その地域に住む人々と音楽との関係を社会学、人類学、言語学、音楽学などの専門家をまじえて学際的に考察します。

江口一久 遠藤保子 栗本英世 小島美子
サイド・アフメド・モハメド・ハミス 塚田健一
中河伸俊 中村雄祐 宮本正興 山下晋司

アジア・アフリカ言語文化資料の情報処理に関する基礎的研究（奈良 毅）

（所員9名，共同研究員21名）

本プロジェクトは、アジア・アフリカ諸地域における言語、文学、歴史、地理、政治、経済等に関する文献情報をデータベース化し、さらに本研究が行っている海外学術研究による現地調査と連動し、それによって得られた音声・映像・画像情報を利用し、これら文献・音声・映像・画像情報を統合することによって立体的な情報処理を行い、より高度なハイパーテキストを構築することを目的と

します。

本年度は、①南アジア地域に関連した諸言語（ベンガル語、ヒンディー語、パンジャーブ語、タミル語、カンナダ語、サンタル語、カスイ語、ルシャイ語、オリヤ語、カシミール語、マラーティー語、テルグ語、ムンダリー語、メイティ・マニプーリー語、アッサム語、グジャラート語、スィンディー語、マラヤーラム語、ウルドゥー語、ナガ諸語等のデータベース化を行い、その言語学的分析、および統合的な情報処理（ハイパーテキスト）の方法を研究するグループと、②西アジア地域に関する諸言語（アラビア語、ペルシア語、トルコ語、オスマン・トルコ語、アゼリー・トルコ語、ウズベク語、ウイグル語、ヘブライ語、グルジア語、アルメニア語等）のデータベース化を行い、その言語学的・歴史学的分析、および統合的な情報処理の方法を研究するグループとの2分科会を設けて実施します。両分科会は、常時情報交換を行い、かつ共同研究会をもつことによって各分科会の研究成果を統合した広域的ハイパーテキストを構築することをめざします。

家本太郎	内田紀彦	岡口典雄	長田俊樹	小野 浩
北川誠一	児玉 望	榊 和良	坂田貞二	
サロージ・K・チャウドリー		杉山正明	高橋孝信	長 弘毅
ナレシ マントリ	林 佳世子	林 典門	藤井 毅	間野英二
溝上富夫	藪 司郎	山下博司		

カンボジア事典編纂のための基礎的研究（峰岸真琴）（所員2名，共同研究員11名）

本プロジェクトの設立目的は、カンボジアについて、言語、歴史、民族、民俗、政治、経済、社会等のあらゆる分野において、いわゆる百科事典的な基本的情報を集積していくことにあります。これと並行して、カンボジアに関する基礎的データの充実に役立つような、現在各分野において入手可能な文献、資料のデータベースを作成することも企画しています。将来的にはその成果を、電子メディアを含む何らかの事典の形式にまとめることを構想しています。

天川直子	石沢良昭	伊東照司	岡田知子	友田 錫
野副由美子	林 行夫	吹抜悠子	福田権一	三上直光
本橋 栄				

広域言語文化第一部門

アジア人移民社会の研究—特にインド人（南アジア人）コミュニティを中心に（内藤雅雄）
（所員2名，共同研究員12名）

このプロジェクトは古くから世界の広範な地域に移民として出ていったインド人（パキスタン系・バングラデシュ系の人々も含めて南アジア人と総称）を対象としています。彼らが移民先でどのようなコミュニティを形成してきたのか、またそのコミュニティを受け入れる社会全体の中でどう位置づけられてきているのかを、政治学、経済学、歴史学、言語学、文化人類学など学際的な共同作業として考察しようとするものです。

彼らは移民の時期や動機は異なりますが、世界各地に広がっていきました。そして時に先住の人々との間にそごや対立を生み出したり、また不可避免的にホスト社会の社会的、文化的影響と対面する中で、言語、宗教、カーストなどさまざまな伝統的な価値や慣習の維持・摂取につとめながら、独自のアイデンティティを創出してきました。本研究では、インド人（南アジア人）の各地各国におけるこうしたコミュニティ形成の歴史をつぶさに再構築し、次いで、現在の彼らのコミュニティのあり方を、現地調査データなどを基にしながら研究します。

宇佐美久美子	木曾順子	古賀正則	澤 滋久	富永智津子
中村平治	長谷安朗	浜口恒夫	松井 透	三宅博之
山本由美子	脇村孝平			

東アジアの社会変容と国際環境（中見立夫）（所員5名，共同研究員27名）

近年における国際情勢の変化と学术交流の発展によってわれわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次史料に対し、以前とは比べられないほど容易に、接近できるようになりました。さらに現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおり、われわれの研究への刺激となっています。ただ対象とすべき史料の量はあまりに膨大で、その情報を体系的に把握してはいません。また個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組を検討することが必要です。本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に連関していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討しています。東アジア史に関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざします。

毎回テーマをかえながら、海外からの参加者もまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催しています。

赤嶺 守	石井 明	石浜裕美子	石橋崇雄	伊藤秀一
井上裕正	江夏由樹	岡 洋樹	尾形洋一	笠原十九司
加藤直人	岸本美緒	楠木賢道	佐々木揚	邵 建国
武内房司	張 士陽	坪井善明	中村 義	萩原 守

浜下武志 原 暉之 藤井昇三 毛里和子 森川哲雄
 森山茂徳 柳澤 明

言語文化接触に関する研究（中嶋幹起）（所員4名，共同研究員17名）

東アジアに共生する幾多の民族の言語は多様性に富み，その長い歴史と相まって，多くの言語資料が集積されています。さらに，近年は，中国やソ連などの開放政策により学術成果も公にされつつあります。本プロジェクトでは，満州語，モンゴル語，エウエンキ語，漢語，ウイグル語，チベット語，白語等の言語研究者が現地調査での成果を報告し，それぞれの研究について，言語学のみならず，文化人類学，歴史学などの分野を含めた多角的かつ広域的視点から討論を行いつつ，言語のダイナミクスを探ります。

鵜殿倫次 落合守和 栗林 均 高田時雄 武内房司
 津曲敏郎 西 義郎 花登正宏 樋口康一 藤本幸夫
 星実千代 細谷良夫 前川捷三 村上嘉英 森安孝夫
 山川英彦 横山廣子

南東アジアにおける「正統」の波及・形成と変容（石井 溥）（所員5名，共同研究員25名）

ユーラシア大陸南東部の多くの文化は，それぞれの基層文化の上にインドや中国の文明の影響を直接，間接に受けつつ形成されてきました。そのようななかで，各文化・社会が自らを「正統的」なものとして作り上げていく傾向はかなり一般的に見られる現象と考えられます。このような「正統」観念はインド文明の及んだ地域では，人間・文化・社会のあるべき姿を指す「ダルマ」という言葉で多く表わされます。

本プロジェクトでは，ヒマラヤ地域，スリランカ，東南アジアを主対象地域とし，大文明，特にインド文明との接触によって形成された諸文化のありかたを「ダルマ」の概念を念頭に置きつつ比較考察し，その類似性，多様性を究明し，さらに相違についてはその存在の理由を考えます。分析対象としては政治組織，都市構造，宗教，宗教図像，社会構造，日常生活などの側面を取り上げ，基層文化にも十分な注意を払います。

なお，ここでいう「南東アジア」とは，アジアのなかでカシミールより東および南に位置する諸地域をさします。

飯島 茂 井狩彌介 永ノ尾信悟 奥平龍二 鏡味治也
 鹿野勝彦 小林正夫 島 岩 鈴木正崇 関根康正
 高谷紀夫 立川武蔵 田中雅一 長野泰彦 西 義郎
 西村祐子 藤井知昭 マハラジャン・ケシャプ・ラル 三尾 稔
 南真木人 森 雅秀 山下博司 山本真子 山本勇次
 結城史隆

東南アジアにおける「共存」・「共生」の思想（栗原浩英）（所員4名，共同研究員12名）

1980年代後半にはいり，東南アジア地域の大部分の国が権威主義体制の動揺，カリスマ的指導者の高齢化，経済発展に伴う中間層の成長，社会主義陣営の崩壊と冷戦的状况の終結など様々な理由により，政治的変動に直面しています。その中で顕在化してきたひとつの現象に，「民主化」・「和解」などの語に象徴されるような，自らとは異質な集団の存在を認めようとする「共存」志向があります。本プロジェクトは，これまで対決，闘争，植民地化，統合・被統合，支配・被支配，統治者・被統治者などの観点からとらえられることの多かった東南アジア地域の歴史や社会を，「共存」・「共生」の主体として国家，中央と地方，地域，エスニシティ，政治（イデオロギー）集団，利益集団，宗教集団など多様なレベルを設定し，積極的に学際的なアプローチを導入することによって，所期の課題の実現を目指していきます。

プロジェクトの継続期間は3年間とし，最終年度には成果を刊行する予定です。

石井和子	加藤久美子	川島 緑	小泉順子	白石昌也
未廣 昭	高田洋子	高谷紀夫	林 行夫	弘末雅士
古田元夫	宮本謙介			

漢民族と周辺少数民族の文化の接触と変容（三尾裕子）（所員2名，共同研究員21名）

本プロジェクトは，漢民族及び周辺の少数民族コミュニティの社会構造や価値観などの分析を通し，これら諸民族文化の伝統的様態，また相互の接触による変容の様を考察します。少数民族の文化は，それぞれの基層文化を持ちながら，歴史的に常に中華文明と不即不離の関係にあり，その影響を受けてきました。しかし，また，漢民族も諸民族の融合体であり，漢民族が主に担ってきた中華文明も，諸少数民族文化の影響を色濃く受けており，地域差も大きいと考えられます。本プロジェクトでは，中国大陸部だけでなく，台湾，香港，東南アジア華僑社会，東南アジア内陸部の諸民族社会も視野に入れつつ，これらの文化の共通性や多様性を究明します。

ジェレミー S. イーズ	植野弘子	王 松興	小熊 誠	
川崎有三	韓 敏	栗原 悟	清水 純	末成道男
鈴木正崇	瀬川昌久	曾 士才	武内房司	轟莉 莉
西澤治彦	長谷川清	馬場雄司	堀江俊一	横山廣子
吉野 晃	吉原和男			

個別言語の音韻・形態・統語データの分析・記述と言語類型論（松村 登）

（所員15名，共同研究員24名）

この共同研究プロジェクトは，参加者めいめいが自分の専門領域の言語の音韻・形態・文法データを持ち寄り，それらを他の言語の研究を専門とする人々と一緒になって分析することによって，そのデータから得られる知見を，その言語の専門家でない研究者との間で共有できるような，できるだけ一般的な形に提示するための分析・記述方法を開発することを目的とするものです。個別言語の研究

者自らが、言語類型論の研究者の協力を得て、言語類型論の視点から自らの研究を再検討することによって、個別言語の研究と言語類型論の研究の双方にとって最適の言語研究のパラダイムを構築することをめざしています。

井出祥子	梅田博之	上野善道	遠藤 史	大堀俊夫
岡田公夫	小川暁夫	尾上圭介	岸田泰浩	児玉 望
坂原 茂	佐久間淳一	柴谷方良	田窪行則	柘植洋一
土田 滋	角田太作	中川 裕	仁田義雄	西村義樹
町田 健	松本克己	松森晶子	湯川恭敏	



パキスタンの焼きいもやさん。しげしげ見ていたせいか、一切れ喜捨してくれた。幼年期一生ならず二生分のさつまいもを食べた私としては、絶対に口にしたくないものであるが、いただいた手前食べてみた。うまかったのは、さつまいもそのもののせいか、それとも、売り手の暖かい心のせいか、それとも、そのとき空腹だったせいか、今もって分からない。(上岡弘二：1990年冬、ラホールにて)



弓矢の競技を楽しむブータンの男性。この頃使っている弓は洋弓である。(石井 溥：パロ谷にて)

広域言語文化第二部門

アフリカにおける都市化の比較研究（日野舜也）（所員12名，共同研究員29名）

本研究は，現代アフリカにおいて進行するもっとも大きな社会変化である都市化と地域形成の問題について国民社会形成，都市社会の構造，都市-村落関係の展開，地域共通文化，リングアフランカ（地域共通語）の機能などとの関連について，長期のフィールドワークをともなう，長期継続的な比較研究をおこない，その資料に基づいて動態的に解明しようとするものです。今年度は，昨年度につづき，アフリカにおける伝統都市に焦点をあて，アフリカの国民社会形成の30年間における社会変化を，社会経済体制の変動，生活史などについての現地調査をおこないます。

赤坂 賢	阿久津昌三	池谷和信	上田 将	江口一久
小川 了	小倉充夫	門村 浩	菊地滋夫	栗本英世
小馬 徹	坂本邦彦	嶋田義仁	白井和子	戸田真紀子
富川盛道	富永智津子	野元美佐	原口武彦	福井勝義
前山 隆	松園萬亀雄	松田素二	宮治美江子	吉田昌夫
米山俊直	和崎春日	渡部重行	和田正平	

イスラム圏における異文化接触のメカニズム-人間動態と情報に関する総合的研究（家島彦一）

（所員10名，共同研究員35名）

（目的）

過去5年にわたる研究プロジェクト「市の比較研究」と国際学術研究「イスラム圏における市の比較研究」（平成元年～平成3年実施）の成果をふまえて，人間動態のダイナミズムとそれにともなう言語文化接触の諸態様を総合的に分析・研究します。

最近の世界情勢を念頭に，国家体制の解体，社会・経済の変動，民族・宗教対立などの状況と人間動態，情報交換のあり方について，月1回程度の小研究会を行っています。

（研究の内容）

- ①人間の地理的・社会的移動と言語・文化接触の流動現象（mobility）を「人間動態」としてとらえる。
- ②人間動態の諸要因およびその態様と影響について，言語学・歴史学・人類学・地理学などの諸分野から学際的に分析・研究する。
- ③人間動態にともなっておこる言語文化適合（不適合）に関する事例研究。
- ④複数の言語圏を統合するような共通言語の機能，複数の文化圏の基底に共通して存在する物質・生活複合の諸側面について検討する。
- ⑤人間や情報の移動を支えるような受け渡しシステム，あるいは社会の中で情報やモノの交換・接続の役割を果たす要素についての比較研究を行う。
- ⑥プロジェクト研究会と連動して，国際学術研究「イスラム圏における人間移動と共生システムに関

する調査研究」を実施する（3年計画）。

⑦研究プロジェクトは計5ケ年にわたって継続する予定である。

赤堀雅幸	新井政美	医王秀行	大塚和夫	大月康弘
奥田 敦	片倉もところ	加納弘勝	川瀬豊子	私市正年
北川誠一	小林春夫	小松久男	佐藤幸男	佐原徹哉
清水宏祐	清水美穂	新谷英治	ジョン・フィリップス	
店田廣文	杉山正明	鈴木 均	高階美行	高山 博
柘植洋一	寺島憲治	戸谷 浩	中川聡史	長谷部史彦
羽田 正	濱田正美	堀内正樹	松田俊道	松原正毅
三木 亘				

アフリカ言語学の諸問題（守野庸雄）（所員7名，共同研究員11名）

アフリカには、約5億の人が2000の言語を話して生活しています。中には、話し手の数が1千万人を越える大言語もありますが、その多くは、話者が数万から数10万の小言語（いわゆる部族語）です。1960年代以降、アフリカにおける言語記述が急速に進み、現在アフリカ諸語は世界の言語学に対していくつもの重要な理論的課題を提供するに至っています。一方、日本においても、言語研究はアフリカ研究の初期の段階から係わってき、また、かなりの数の研究者が専門的に調査、研究を行ってきたにもかかわらず、その組織化が遅れ、個々の研究に対しては海外からの評価も高いのですが、全体としては、まだ力を出し切っていないうらみがあります。本研究プロジェクトは、この障害を克服すべく日本のアフリカ諸語研究者を一同に集め、アフリカ諸語を題材とした理論的、実際の、また社会・政治との関係など、言語をめぐる諸問題を討議し、ひいては日本のアフリカ言語学を世界の言語学の一部として正当に位置づけることを目標とします。

小森淳子	清水紀佳	砂野幸稔	竹村景子	中川 裕
中島 久	西江雅之	稗田 乃	宮本正興	宮本律子
湯川恭敏				

A・A研創立以来のプロジェクト一覧

プロジェクト名	主 査	期 間
イスラム化と近代化に関する調査研究	前 嶋 信 次	1969～86
アフリカ部族社会の比較研究	富 川 盛 道	1969～76
東南アジア・ナショナリズムの形成と価値体系の研究	河 部 利 夫	1969～70
エジプト農村社会と農民生活の研究	板 垣 雄 三	1969～71
現代インドの民族統合と政治的課題の研究	中 村 平 治	1969～71
アジア・アフリカにおける祖先崇拜の比較研究	原 忠 彦	1969
インド・パキスタン現代文学の研究	奈 良 毅	1969～71
アジア・アフリカ文法調査票に関する研究	石 垣 幸 雄	1970～75
アジア・アフリカ諸言語についての文法研究	奈 良 毅	1976～82
語彙とその意味領域調査のための基礎研究	梅 田 博 之	1970～74
東南アジアにおける社会文化変動過程の諸相の研究	河 部 利 夫	1971～73
アジア・アフリカにおける宗教運動の研究	原 忠 彦	1971～74
満州口語基礎語彙集満州口語総索引の作成	大 江 孝 男	1971～73
アルタイ学辞典の編纂	岡 田 英 弘	1972～77
インド村落共同体の研究	辛 島 昇	1972～73
トルコ民族とイスラムに関する研究	永 田 雄 三	1972～73
アジア・アフリカの象徴と世界観	山 口 昌 男	1973～1985
アフリカ学術調査	富 川 盛 道	1974～85
言語情報機械処理のための基礎的研究	橋 本 萬 太 郎	1974～76
アジア社会の原構造と変容過程	飯 島 茂	1974～76
オセアニアの言語と文化の総合的研究	土 田 滋	1975
インド・パキスタン分離独立の史的研究	中 村 平 治	1975～78
言語処理研究	加 賀 谷 良 平	1977～83
南アジアの大河流域における農村社会の研究	原 忠 彦	1977～86
ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究	飯 島 茂	1977～86
文化記号論の基礎研究	山 口 昌 男	1977
日本の言語文化の比較研究資料の充実	岡 田 英 弘	1978～82
アジアの民族運動とその国際関係	中 村 平 治	1980～85
言語文化調査票	石 垣 幸 雄	1981～83
アジア・アフリカ諸言語の研究	奈 良 毅	1981～84
口頭伝承の比較研究	川 田 順 造	1982～85
内陸アジア史文字資料の研究	岡 田 英 弘	1983～86
東南アジアの自生的思考：その構造と歴史的展開	池 端 雪 浦	1985～87
象徴と世界観の比較研究	山 口 昌 男	1986～93
アジア・アフリカ諸言語の比較・対照研究	奈 良 毅	1986～90
南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成	奈 良 毅	1986～90
第三世界と日本—現状と展望	中 村 平 治	1986～88
「未開」概念の再検討	川 田 順 造	1986～91
南アジアにおける社会集団形成過程に関する比較研究	内 藤 雅 雄	1986～90
イスラム圏における異文化接触のメカニズム	家 島 彦 一	1987～91
インド・アフリカ・チベット・ビルマ系文化の接触・変容の研究	石 井 溥	1987～90
第三世界の文化研究	原 忠 彦	1987～89
東南アジア研究基礎資料のデータベース化に関する基礎研究	坂 本 恭 章	1987～89
西アジア研究資料のデータベース化に関する基礎研究	永 田 雄 三	1987～90
アジア遊牧民の歴史と言語	岡 田 英 弘	1988～92
東南アジアの政治と文化	池 端 雪 浦	1988～90
国際関係論の基礎的研究	中 村 平 治	1990
現代世界の地域統合とエスニシティー	中 村 平 治	1991～93
東南アジア史像の変革	池 端 雪 浦	1991～93

共同研究員（公募）

1978年度より、共同研究プロジェクトとは別に、本研究所において一定期間（2週間以上2ヶ月以内）研究をおこなう共同研究員を公募しています。

大学院地域文化研究科博士後期課程

東京外国語大学では、多元化した言語・文化・歴史・政治・経済などを統合し、かつ深く掘り下げる教育者・研究者の育成という学術的な要請と、国際交流の高度化・複雑化に伴う高度な知識を有する国際的な人材や専門職員の需要に応ずるために、言語教育と地域研究をより高度に発達させた大学院地域文化研究科博士後期課程を1992（平成4）年度より設置しました。本研究所では教育体制のこうした発展に協力すべく、本研究所に大学院委員会を設置し、15名（平成5年度）の教官が参加し、言語学・民族学・文化人類学・歴史学などの分野における学生（毎年4名程度）を受け入れ、教育活動に従事することとなりました。

研究生

大学卒業かそれと同等以上の学力があるものが研究所で研究に従事することを希望するときは、審査のうえ研究生として入所を許可します。

研究生は入所料及び研究料を納付し、担当の教官の指導を受けます。



ダン族の村で乾季に行われるレスリングの試合会場にて。力士の随行役をつとめる男たちは、力士からレスリング用の呪葉を預かり、それを試合会場に携行して、リングの外から試合をみまもる。獣皮を肩から腕にかけ、左手には小型のサルのミイラ、右手には角笛と払子を握る。眼が鋭く輝く。（真島一郎：1990年，コートディヴォワール共和国，ダナネ県）

言語文化情報を総合化した辞典・事典編纂

本研究所はアジア・アフリカの諸言語のデータをコンピュータ化し、それぞれの言語の音韻論的、統辞論的、語彙論的分析はもちろんのこと、歴史学的、民族学的、社会学的研究など、多目的な用途に供せられるデータベースの作成をはかってきました。本研究所としては、最も重要な事業の一つであるアジア・アフリカの諸言語の辞典や文典の編纂に基礎資料を提供して、この方面におけるわが国の立ち後れを克服し、またアジア・アフリカ諸国との多面的、多角的交流という社会的要請にこたえようとしているわけですが、同時にこれは全国の研究者の共同利用にも供されます。この目的のために、一方で各言語のデータについて一定の音韻論的、統辞論的、意味論的、語彙論的情報を分析・形式化し、他方ではこれらの情報を実際の研究に使いやすいようにプリントアウトするために、デヴァナーガリー、ビルマ、ベンガル、タイ、クメール、チベット、アラビア、ハングル、モンゴルなどの文字フォントを製作し実際に使用しています。また現在、西夏文字のフォントを製作しています。実際の言語の例としては、ベンガル語、中国語、朝鮮語、ハウサ語、フラ語、ヨルバ語、ヒンディー語、クメール語、アラビア語、ペルシア語、スワヒリ語、タイ語、チベット語、満州語などのデータが蓄積されつつあります。

さらに、近年の画像処理技術のめざましい発展をもとに、文字情報のみならず、音声・画像・映像情報をコンピュータに取りこみ、文字情報と結びつけて、歴史文献や祭祀、舞踊、音楽などの民族的データを蓄積し、これを統合化して高度なデータベースを構築し、辞典・事典の編纂に応用するための研究を進めています。

言語データのプリントアウト例（上：モン語、下：西夏文字）

- 0 5 4 5 0 ိတ်ဝေဝေဝေကိံအိတ်ညိလဟုံဟာ 私の髪を少し切ってくれないか。 ဝေဝေဝေကိံဝေဝေဝေ
髪を刈る。 ဝေဝေဝေဝေဝေ 羊の毛を刈る。
- 0 5 4 5 5 ဝေဝေဝေ 散髪する。 အိတ်ကိံအိတ်အိတ်အိတ် 今日は散髪（してもらい）に行く。
ဝေဝေဝေဝေဝေ 火曜に散髪するのは不幸を招く。 တာဟတော့ဝေဝေဝေ
理容学校。
- 0 5 4 6 0 သွာဝေဝေဝေ 理髪師。
- 0 5 4 6 5 ချင်ဝေဝေဝေ 床屋。理容店。

西夏文字の例として、一連の文字列が示されています。

言語研修

本研究所では、アジア・アフリカ地域の言語の修得のために、本研究所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者を講師として、毎年夏、言語研修を開講しています。開講する言語の数は、東京会場が2言語、関西会場が1言語、研修時間は150時間です。これまでに、言語研修を実施した言語は、次の通りです。(1994年実施決定を含む) (28頁参照)

() 内は修了者数

年度	東 京	関 西
1967	朝鮮語	--
1968	ベンガル語	--
1970	アムハラ語, ヘブライ語	--
1971	スワヒリ語	ビルマ語
1972	福建語	--
1973	チベット語	--
1974	朝鮮語(10), チベット語(12)	--
1975	カンボジア語(8), ベンガル語(12)	--
1976	ペルシア語(10), スワヒリ語(9)	ビルマ語(5)
1977	広東語(14), マラーティー語(6)	モンゴル語(18)
1978	タイ語(12), トルコ語(12)	ペルシア語(13)
1979	ハウサ語(8), ビルマ語(14)	タイ語(7)
1980	ネパール語(14), モンゴル語(14)	ベトナム語(5)
1981	ヒンディー語(8), パシュトー語(10)	中国語中級(26)
1982	アラビア語エジプト方言(12), ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1983	チベット語(12), フィンランド語(21)	パンジャブ語(8)
1984	ピリピノ語(タガログ語)(12), ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1985	朝鮮語(14), カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1986	西南官話(5), タミル語(12)	ベンガル語(8)
1987	中原官話(10), タイ語(19)	シンハラ語(8)
1988	ペルシア語(10), トルコ語(16)	インドネシア語(6)
1989	ベンガル語(20), ベトナム語(9)	アラビア語エジプト方言(15)
1990	朝鮮語(11), インドネシア語(11)	ペルシア語(14)
1991	エストニア語(12), ビルマ語(15)	中国語(13)
1992	ネパール語(12), アラビア語エジプト方言(15)	フィリピン語(12)
1993	朝鮮語(17), グルジア語(17)	モンゴル語(17)
1994	ウォロフ語, ヒンディー語	トルコ語

研修生（各言語約10名）は、大学など研究機関を通じて全国から公募します。受講を認められた人は入所料、受講料を納付することになります。また、課程を修了した人には審査のうえ修了書が授与されます。

上記の研修事業と関連して、より効果的で充実した研修方法を開発するための研究の一環として、科学研究費補助金による支援を受けつつ、言語研修において自動学習機器に合わせて機械化する部分をプログラム（CAI）化するための研究を実施しています。この研究によって開発した「CAIプログラム」は、研修コースのなかで補助教材として活用することが期待されるばかりでなく、必要に応じて希望する言語の学習をすすんで個人的に受講できるよう設営し、増大し、多様化する社会的要請に応えるようにすることを目指すものです。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
昭和61年度言語研修



西南官話・タミル語 ベンガル語

7月14日～8月15日（東京） 8月4日～9月5日（大阪）

募集人員 各言語10名程度 募集要項申込先
募集期間 6月10日～20日 アジア・アフリカ言語文化研究所
応募方法 募集要項参照のこと 〒114 東京都北区西ヶ池4丁目1番11号
TEL 03-3817-4111内線3700部・情報処理部

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
1989年 言語研修



アラビア語 ベトナム語 ベンガル語

7月24日～8月25日 7月20日～8月30日 7月21日～8月30日

募集人員 各言語10名程度 募集要項申込先
募集期間 6月12日～26日 アジア・アフリカ言語文化研究所
〒114 東京都北区西ヶ池4丁目1番11号
TEL 03-3817-4111内線3700部・情報処理部

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
1993年 言語研修

グルジア語 モンゴル語 朝鮮語

東京 大阪 東京

7月19日～8月27日 7月19日～8月28日 7月19日～8月21日

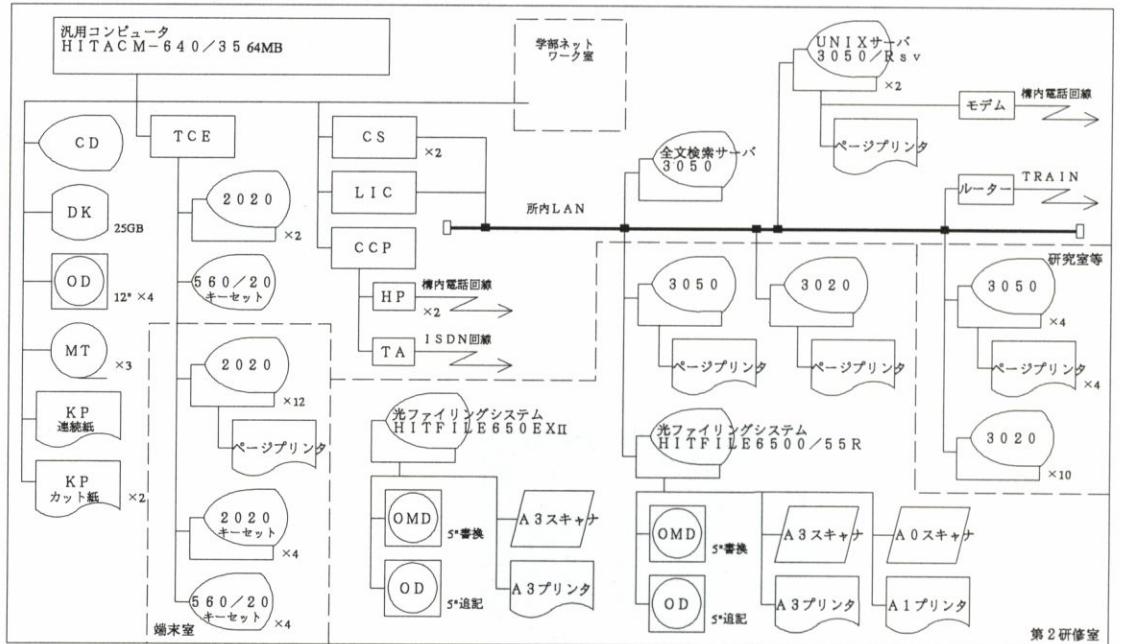


募集要項申込先
〒114 東京都北区西ヶ池4丁目1番11号
TEL 03-3817-4111内線3700部・情報処理部

募集人員 各言語10名程度 募集期間 6月7日～21日

電算機室

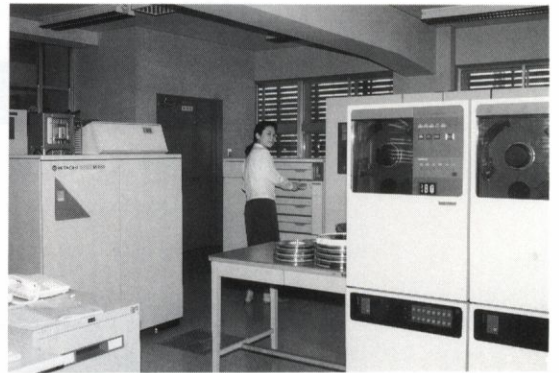
システム構成図



1978年にメインフレーム・コンピュータを導入以来、何代かの世代交代を経て、現在はHITAC M-640システムが主機となっています。ハードウェアの面からは、特別なものはありませんが、自然言語処理という唯一の目的に沿って、それに適した構成がなされています。

非ラテン・非漢字系の文字体系を扱うために、文字フォントの作成に始まり、テキストのインプットシステム、エディタ、レイアウト、プリント

アウトなどの、基本となるユーティリティー・ソフトウェアが備えられています。ユーザーはこれらを利用して、インデックスの作成や辞典編纂、データベースの編成、テキスト分析などの処理をおこなうことができます。



図書室

日本における唯一の、大学付置の人文科学系共同利用研究所である本研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語文化に関する研究に必要な基礎資料を、1964（昭和39）年の創設以来収集してきました。

対象地域の広域化、研究テーマの複合化、方法論の多様化など、これらの地域に関する研究の諸条件は近年大いに変化していますが、こうした状況に留意し、かつ内外の諸研究機関から参加する共同研究員や研究生および一般の研究者の需要にも応えるため、幅広い文献・資料の収集に努めています。海外研究機関（56カ国220機関）との図書交換を通じて研究書・論文集等も収集し、1994（平成6）年3月末現在、蔵書総数は79,000冊、マイクロフィルム8,000リール、マイクロフィッシュ23,000シート、雑誌等1,600種です。

蔵書のなかには、アジア・アフリカ諸地域の国語教育資料をはじめ、世界各国語の聖書などが含まれていますが、洋雑誌の整備には特に力をいれ、機会あるごとにバックナンバーを購入する努力を続けています。たとえば、19世紀末から1970年までのイランの主要新聞65種がマイクロ化されているほか、19世紀創刊のベンガル語文芸雑誌5種類のバックナンバーがそろっているなど、他の研究機関に見られない資料が所蔵されています。

また本研究所の特色あるコレクションとして、次のような文庫があります。

① **山本文庫**（1967年受入）

著名な満州語学者、故山本謙吾氏（1920～65）の個人蔵書で、満州語・ツングース語関係の諸文献を中心に言語学・音声学・アルタイ語学等に関する諸文献（和・洋書計598冊）を含む。

② **浅井文庫**（1970年受入）

著名なオーストロアジア言語学者、故浅井恵倫氏（1895-1969）の蔵書。アジア・アフリカ諸言語の研究書・辞典類・雑誌等（和・洋書計870冊）をはじめ、高砂族関係の貴重な言語資料、ニューギニアの民族写真その他（アルバム、ノート、原稿、書簡、直筆辞書、単語カード、未発表の高砂族伝説集索引カード等）を含む。

③ **小林文庫**（1976年受入）

著名なモンゴル史研究者である故小林高四郎氏（1905～87）の個人蔵書で、モンゴル民族の生活と習俗に関する文献（和・洋書計1,671冊）を含む。

④ **前嶋文庫**（1986年受入）

わが国におけるイスラム研究の創立者の一人である故前嶋信次氏（1903～83）の個人蔵書のうち、和漢書1,272冊を受け入れたもの。イスラム関係のみならず、東洋史、東西交渉史、旅行記などを含む。

本研究では、アジア・アフリカ諸国の各種図書資料の収集を積極的におこなっており、広く研究者の便宜に供する態勢を整えております。1993（平成5）年度には、以下のような資料を収集しました。

近東地域伝道記録文書；1817-1919年（マイクロフィルム219リール）（アメリカ海外伝道委員会年次報告記録）

Papers of American Board of Commissioners for Foreign Missions.

アメリカン・ボードは1810年に設立されたプロテスタント伝道団。本資料はオスマン帝国領内のキリスト教徒（東方諸教会及びカトリック）・ユダヤ教徒のプロテスタント化運動に関する同組織の現地報告書で、当時の宗教・社会・政治状況を知るうえで貴重な記録。

中東関係文書；1796-1949年（マイクロフィルム727リール）（米国国立公文書館；米国国務省文書）

Collection of Official Records of the U.S. Department of State relating to the Middle East, 1796-1949.

国務省内部文書や領事・公使報告書を中心に、オスマン帝国、トルコ、アラブ諸地域とイランの情勢や、これら諸地域と米国をめぐる国際関係に関する重要な情報を含む一次資料。19世紀後半以降が主体。パレスティナ関係の記録も多く、機密文書もある。

ミンガナ・コレクション（2,896点；マイクロフィッシュ9,596シート）

ミンガナ・コレクションとはDr. Alphonse Mingana（1881年、イラク生）により収集されたオリエント写本のコレクションであり、現在イギリスのSelly Oak Colleges Libraryで保管されている。彼は、カルデア教会のキリスト教徒で、モースルで教師となり、その後、英国へ渡った。その間、レバノン、シリア、イラク、シナイ半島、上エジプトを旅行し、アラビア語、シリア語写本を収集した。

台湾関係資料集（1,134冊）

本資料は、明治から昭和60年代までの台湾の政治、経済、外交、歴史、民族（俗）、言語、文学、産業等の多岐にわたる図書、雑誌等のコレクションである。特に日本統治時代に係わる台湾の政治事情、台湾総督府、台湾官公庁、学術機関誌、写真帳、台湾語の辞典・研究書等貴重な資料群をなしている。本資料は、台湾、中国、日本、欧米等で刊行された資料を含む。

エジプト誌《第2版》1820-1830、テキスト（26冊）及び図版（11部）

ナポレオン・ボナパルトは、1798年エジプトに遠征した。その時約180名の学術調査団を随行し、エジプトの総合的な調査を行った。その内容は考古、民族、自然、地理、産業等多岐にわたっている。本資料は、その詳細な記録（報告書）である。1804年が初版であり、その後、1820年から

1830年にルイ18世の勅命により再版されたのがこの《第2版》で、以後刊行されていない。

また1992年（平成4）年度までに以下のような資料を収集しています。

Meydan-Larousse（メイダン・ラルース百科事典）

フランスの著名な百科事典を編纂したラルース社との提携によって作られたトルコに関する最も標準的な百科事典。トルコの歴史、政治、経済、文化に関する基礎的な参考図書。

Türkiye Cumhuriyeti Resmi Gazete（トルコ共和国官報）

「トルコ革命」途上の1920年から1979年にいたる同共和国の官報セット。わが国唯一のコレクション。「トルコ革命史」、その後の共和国建設の過程を研究するための基本的な第一次資料。

Türkiye Büyük Millet Meclisi Tutanak Dergisi（トルコ大国民議会議事録）

上に掲げた資料と同様に、1920年に発足した同議会の1969年にいたるまでの公式議事録であり、トルコ現代史研究の第一次資料。上の2点の資料収集によって、トルコ現代史研究の基本文献がわが国ではじめて参照できるようになった。

トルコ歴史学協会出版物セット

1931年にトルコ共和国初代大統領ムスタファ・ケマル・アタテュルクの唱道によって発足した同協会の出版物。トルコ歴史研究の代表的な文献を網羅している。

Cumhuriyet Ansiklopedisi（『共和国百科事典』ほかトルコ文献セット）

各種百科事典を中心とした、トルコ共和国で刊行された基本文献。歴史、宗教、文化、政治、経済万般におよぶトルコ語の基本文献。研究資料にとどまらず、トルコ語教育にも利用できる。

ロンドン大学・東洋アフリカ研究所蔵「東地中海・オスマン帝国関係図書」

16世紀にイタリア語、ラテン語で書かれたオスマン帝国および東地中海諸国に関する書物250冊余のマイクロフィッシュのセット。16世紀の地中海地域研究の基本文献として貴重なもの。

Takvim-i Vekayi（オスマン帝国官報）

1831年から1922年にいたる同国の歴史のみならず、同時期における中東の歴史研究の基本的第一次資料。ごくわずかな欠落（6号分）があるが、現在世界でもこれだけ欠落の少ないコレクションは存在しない貴重なもの。

Yugoslav Statistics, 1863-1891: Bosnia, Croatia, Serbia（ユーゴスラヴィア統計）

表題の地域の人口、農業、鉄道など項目別統計のマイクロフィルム。ユーゴ諸地域、ドイツ等で

作成されたもの。現在なお民族紛争の続発するバルカン，とくにユーゴの19世紀末における政治，社会情勢の分析のための基本文献。

Osmanlıca Tiyatro Afişleri, 168 adet (オスマン語劇場ポスター：168枚)

19世紀末から20世紀初頭にかけてイスタンブルで上演された演劇のポスターおよびパンフレットのコレクション。イスラム社会における西欧文化受容を演劇の側面において理解する好資料。世界でもまれなコレクション。

Basılmamış Eserleri Yazma Nushaları (未刊行戯曲草稿30点)

上のポスターと同時期に書かれた戯曲の台本。トルコ文学史，文化史の第一次資料。

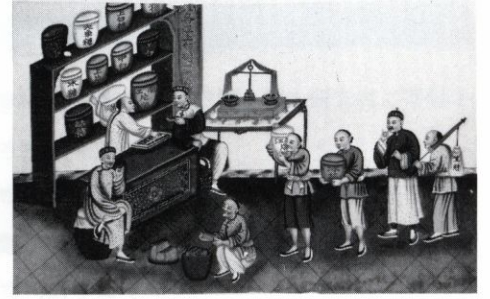
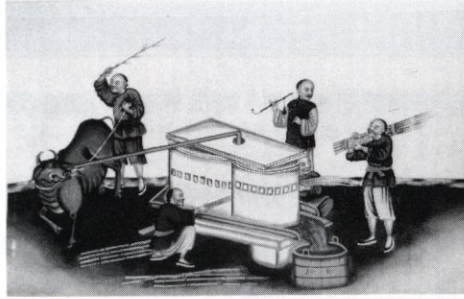
中国の国内事情：1910-1949年 (マイクロフィルム506リール) (米国国立公文書館；米国国務省公文書)

Collection of Official Records of the U.S. Department of State relating to Internal Affairs of China 1910-1949.

辛亥革命から国民革命まで (1910-1929)，国共内戦から抗日戦争時期まで (1930-1939)，抗日戦争中 (1940-1944)，人民解放戦争から中華人民共和国成立まで (1945-1949) に至る間の，アメリカ国務省公文書のうち，中国事情に関する出先機関からの膨大な報告書類。内容は，政治，経済，軍事など多岐にわたっている。

Ten Chinese Rice Painting. Subject Matter: Sugar Making. (晩清原画：中国製糖図，1860，水彩画，10枚)

中国の在来製糖技術を図解した10枚シリーズの水彩絵画である。甘蔗の刈り取り，運搬と圧搾，蔗汁の煮詰め，砂糖の結晶などの技術工程の他に，でき上がった砂糖を運搬して店で販売している様子も描かれている。この絵画は，1832年広州で創立された英国の会社である Jardine-Matheson Company (怡和洋行) の株主筋に当たる Landale 家が所蔵していたものである。画家の姓名は不明だが，このシリーズの絵画は，19世紀前半の広州で，ヨーロッパ人のために茶葉生産の様子を描いた絵と同種類のものと思われる。中国の在来製糖技術の全工程を図解した絵画は他に知られていないので，大変貴重なものである。

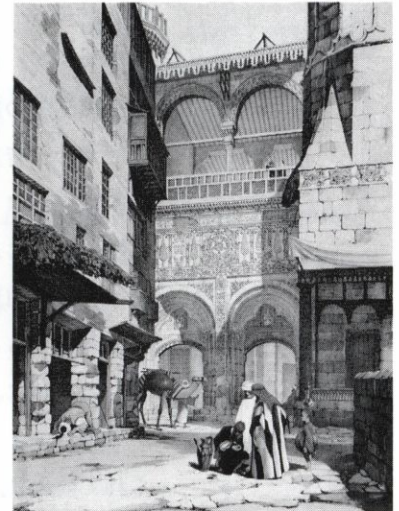


Illustrations of Cairo (カイロ絵画集) 1840年, 英国, 石版画

1824年から1838年にかけてエジプトを数回訪れた英国人Robert Hay及びその他3人が活写したカイロ市街の風景画集。29枚に30の絵画がある。この写実的な作品は、高い美術的価値に加えて、写真技術がない時代の貴重な歴史的情報を豊かに含む画像資料でもある。有名な英国人オリエタリストのE. Laneへの献辞もある。



カイロの奴隷市場, ここにはスーダン方面から奴隷が集められた。



アズハル・モスク正門。ここはイスラム世界随一の学府だった。

アジア史料コレクション

図書室では、18世紀以降の東アジア史に関する文書史料、古文献を収集しているが、主要な清朝文書としては、「殿試策」、「宮嶋家旧蔵李鴻章関係档案」、「鑲白旗光緒二十九年花名身分三代清冊」などがある。台湾関係史料では、「光緒十年具結状」あるいは台湾慣行調査の際、収集された文書の複写アルバムとおもわれる「台湾慣行公私文模写」がある。モンゴル関係史料には、清朝モンゴル文仏典数種、1819年サンクト・ペテルブルグ刊モンゴル語訳「マタイ福音書」、旧満洲国蒙地開放関係資料などを所蔵する。

音声学実験室

音声学実験室には、音声言語の性質・特徴や発話の調音状態を観察し記録するために次のような機械が用意されています。

パーソナルコンピュータを用いた音声分析プログラムでは、音声の各時点ごとの構成周波数の変化や強さを濃淡模様で表示するスペクトログラムや基本周波数の抽出ができます。スペクトログラムでは、従来の機械式のそれと同様に、用途に応じてワイド・バンド、ナロー・バンド、セクション、音圧の表示ができるうえに、基本周波数を連続的にプロットして表示することもできます。基本周波数測定は、測定したい範囲を音声波形上に指定してもできますが、スペクトログラム上の範囲指定もできますので、基本周波数と音節との対応が容易になります。もちろん、各時点ごとの測定値も表示できます。画面の時間表示も自由に変えることができますので、数文にわたるピッチ変化のようなデータも、また音節内のピッチ変化のような詳細な測定を要するようなデータも画面に表示できます。1サンプルの最大録音時間はサンプリング周波数やコンピュータのメモリーによって異なりますが、現在のシステムでは10kHzを上限とする測定（20kHzサンプリング）のためのデータで、最大約10分間可能です。さらに、ある音声データを他の音声データの任意の部分に付加したり、またある音声データからその一部を切り取ったりすることも可能ですし、音声データの特定の部分のみを繰り返し聴取することもできます。

エレクトロ・パラトグラフは、舌の調音運動を観察し記録するための機器です。32個の微小な電極を埋めこんだ人工口蓋を発話者の口蓋にはめて、各時点ごとの電極と舌との接触状態を、全面パネルに口蓋状に配列したランプの点滅で示してくれます。もちろん、この点滅表示を特殊用紙に記録することもできます。

このほかに、ビデオテープ編集機やカセットテープを高速に複製するテープ・デュプリケーターが、フィールド調査で録音されたテープの複製作成や言語研修用テープの作成のために用意されています。また、良好な条件での発話資料を録音するために、防音室や各種のテープレコーダーも用意されています。

付属施設の音声・言語研修資料室には、フィールド調査で収集された世界の珍しい言語や貴重な民話、民族音楽などのテープやレコードをはじめ、これまでの言語研修テキストのテープ、アジア・アフリカ地域の諸言語の語学テープとレコードが整理・保管されていて、研究者の利用の便を計っています。

さらに、アジア・アフリカ地域のマルチ・データベースの作成が予定されています。これは、アジア・アフリカ地域の言語文化情報を、映像情報・音声情報・文字情報で提供するデータベースです。例えば、「スワヒリ語での挨拶は？」と尋ねますと、音声と文字による挨拶語とその説明に加え、挨拶時の仕草、表情、情感などを表した映像も同時に提供されます。

1993年度出版物

下記の出版物は非売品ですが、著者あるいは編集出版委員会の承認により、研究機関、個人研究者に寄贈することができます。なお、*のものは在庫がありません。

アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos. 46-47 (創立30周年記念号 I)

アジア・アフリカ言語文化研究所 通信, Nos.78~80.

アジア・アフリカ言語文化叢書 29 坂本恭章 モン語辞典.

30 中嶋幹起 電脳処理 御製増訂清文鑑 (第2冊).

アジア・アフリカ基礎語彙集 27 西尾哲夫 *The Arabic Dialect of Qift (Upper Egypt)*.

言語研修テキスト

朝鮮語, 梅田博之編 1冊.

グルジア語, 木下宗篤ほか編 全2冊.

モンゴル語, 橋本 勝ほか編 全3冊.

共同研究報告

アジア・アフリカ文法研究 No.22

辞典編纂6 (小野基・小田淳一, ダルマキールティ著『ブラマーナ・ヴァルティカ自註』総語索引).

カンボジア事典編纂のための基礎的研究: 坂本恭章・峰岸真琴 カンボジア研究No. 1.

AA研東南アジア研究 4(川島緑, 日本のフィリピン占領関係史料目録).

イスラム圏における異文化接触のメカニズム—人間動態と情報— 3.

Bantu Vocabulary Series 10

BESHA, Ruth M., *A Classified Vocabulary of the Shambala Language with Outline Grammar*.

Monumenta Serindica No.24

GENETTI, Carol, *A Descriptive and Historical Account of the Dolakha Nenari Dialect*.

コンピュータマニュアルシリーズ

別冊5 漢字コード表1.

アジア・アフリカ言語データシリーズ

奈良 毅 *Data for the Study of Languages of Asia and Africa 6*.

奈良 毅 *Data for the Study of Languages of Asia and Africa 7*.

Boucle du Niger—Approches multidisciplinaires—

KAWADA, J. (ed.), 1994.

Studia Culturae Islamicae

NAKANO, A., *A Basic Vocabulary in Zanzibar Arabic*, 1994.

NAKANO, A., *Ethnographical Texts in Modern Western Aramaic (1) (Dialect of Jubb'adin)*, 1994.

NAKANO, A., *Ethnographical Texts in Moroccan Berber (1) (Dialect of Anti-Atlas)*, 1994.

一般研究出版物

Bargery Toolbox 2 (MATSUSHITA, S., Based Rev. G. P. Bargery's *A Hausa-English Dicionary*, 1994).

1992年までに出版された出版物一覧

- アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos.*1 (1968), *2 (1969), *3 (1970), *4 (1971), *5 (1972), *6 (1973), *7・*8・*9 (1974), *10 (1975), *11・*12 (1976), *13・*14 (1977), *15・*16 (1978), *17・*18 (1979), *19・*20 (1980) *21・*22 (1981), *23・*24 (1982), *25・*26 (1983), *27・*28 (1984), *29・*30 (1985), *31・*32 (1986), *33・*34 (1987), *35・*36 (1988), *37・*38 (1989), *39・*40 (1990), *41・*42 (1991), *43・*44 (1992), *45 (1993).
- アジア・アフリカ言語文化研究所 通信, Nos.1~77 (1966~93).

アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ピア・アヌマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
- *2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
- *5. TSUCHIDA, S., *Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
- *6. NAGATA, Y., *Muhsin-zâde Mehmed Paşa ve Âyânlık Müessesesi*, 1976.
- *7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasūlid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. McFARLAND, Curtis D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1977.
9. McFARLAND, Curtis D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.
10. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 1, 1978.
11. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 2, 1979.
12. KAWADA, J., *Genèse et évolution du système politique des Mosi méridionaux (Haute Volta)*, 1979.
13. BAUTISTA, Maria L., *Patterns of Speaking in Pilipino Radio Dramas: A Sociolinguistic Analysis*, 1980.
14. 石井 溥, ネワール村落の社会構造と其の変化——カースト社会の変容——, 1980.
15. McFARLAND, Curtis D., *A Linguistic Atlas of the Philippines*, 1980.
16. YADAV, Kripal C., *Elections in Panjab; 1920-1947*, 1981.
17. El-Araby, S.A., *Teaching Foreign Languages to Arab Learners—Methods and Media*, 1983.
18. KAWADA, J., *Textes historiques oraux des Mosi méridionaux (Burkina-Faso)*, 1985.
- *19. MIZUSHIMA, T., *Nattar and the Socio-Economic Change in South India in the 18th-19th Centuries*, 1986.
20. 中嶋幹起, 湘方言調査報告 上冊, 1987.
21. TUNCOKU, A. M., *Japonya'nin çin Halk Cumhuriyeti'ne Karşı Politikası (1952-1978)*, 1987.
22. BALLARD, W. L., *The History and Development of Tonal Systems and Tone Alternations in South China*, 1988.
- *23. ENRIQUEZ, V. G., *Indigenous Psychology and National Consciousness*, 1989.
24. 中嶋幹起, 湘方言調査報告 下冊, 1990.
25. HARA, T., *Paribar and Kinship in a Moslem Rural Village in East Pakistan*, 1991.
26. NASIRI, Mohammed Reza, *Nâsireddin Şah Zamanında Osmanlı-Iran Münasebetleri (1848-1899)*, 1991.
27. SHINTANI, Tadahiko & others: *Textes en Nraa Drûbea*, 1992.
28. 中嶋幹起, 電腦處理 御製増訂清文鑑 (第一冊), 1993.

アジア・アフリカ基礎語彙集

- | | |
|--|--|
| 1. 山本謙吾, 満洲語口語基礎語彙集, 1969. | 11. 橋本萬太郎, ベエ語語彙集, 1980. |
| *2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971 | 12. 新谷忠彦, ラデ語—ベトナム語—日本語語彙, 1981. |
| *3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972. | *13. 藪 司郎, アツィ語基礎語彙集, 1982. |
| 4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973. | 14. 中嶋幹起, 浙南吳語基礎語彙集, 1983. |
| 5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974 | 15. 湯川恭敏, サンバー語語彙集, 1984. |
| 6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975. | 16. 梶 茂樹, <i>Lexique Tembo I</i> , 1986. |
| 7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976. | 17. 辻 伸久, 湖南省南部中国語方言語彙集, 1987. |
| 8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977. | 18. 橋本萬太郎, 納西語料, 1988. |
| 9. 奈良 毅, <i>Avahattha and Comparative Vocabulary of New Indo-Aryan Languages</i> , 1979. | 19. 中嶋幹起, 山東方言基礎語彙集, 1989. |
| 10. 中嶋幹起, 福建漢語方言基礎語彙集, 1979. | 20. 新谷忠彦, 揚 昭, 海南島門語, 1990. |

21. 守野庸雄, 中島 久, スワヒリ語辞典A~C, 1990.
 22. 松下周二, ハウサ語ソコト方言, 1991.
 23. 守野庸雄, 中島 久, スワヒリ語辞典D~J, 1991.
 24. 梶 茂樹, フンデ語彙集, 1992.
 25. 守野庸雄, 中島 久, スワヒリ語辞典K~L, 1993.
 26. 加賀谷良平, *A Classified Vocabulary of the Sandawe Language*, 1993.

言語研修テキスト

- *1. チベット語, 北村 甫ほか編, 全5冊(1974).
 *2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊(1974).
 *3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊(1975).
 *4. ベンガル語, 奈良 毅編, 1冊(1975).
 *5. ビルマ語, 大野 徹ほか編, 全5冊(1976).
 *6. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全3冊(1976).
 *7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全2冊(1976).
 *8. 広東語, 中嶋幹起ほか編, 全4冊(1977).
 *9. マラーティー語, 内藤雅雄ほか編, 全3冊(1977).
 *10. モンゴル語, 荒井伸一ほか編, 全4冊(1977).
 *11. トルコ語, 永田雄三ほか編, 全3冊(1978).
 *12. タイ語, 坂本恭章ほか編, 全2冊(1978).
 *13. ペルシア語, 勝藤 猛ほか編, 全3冊(1978).
 *14. ハウサ語, 松下周二ほか編, 全3冊(1979).
 *15. ビルマ語, 藪 司郎編, 全3冊(1979).
 *16. ネパール語, 石井 溥ほか編, 全3冊(1980).
 *17. モンゴル語, 小沢重男ほか編, 全2冊(1980).
 *18. ベトナム語, 川本邦衛ほか編, 全4冊(1980).
 *19. 中国語, 大河内康憲編, 1冊(1981).
 *20. ヒンディー語, 田中敏雄ほか編, 全3冊(1981).
 *21. パシュトー語, 縄田鉄男編, 全3冊(1981).
 *22. アラビア語, 中野暁雄, サラーフ・アル・アラビイ編, 全2冊(1982).
 *23. ハンガリー語, 岩崎悦子ほか編, 全2冊(1982).
 *24. チベット語, 北村 甫ほか編, 全3冊(1983).
 *25. フィンランド語, 松村一登ほか編, 全3冊(1983).
 26. バンジャープ語, 溝上富夫編, 全3冊(1983).
 *27. ピリピノ語, 池端雪浦, リリア・アントニオ編, 全2冊(1984).
 28. ヨルバ語, 清水紀佳ほか編, 全2冊(1984).
 *29. トルコ語, 勝田 茂編, 全3冊(1984).
 *30. 朝鮮語, 大江孝男編, 全3冊(1985).
 31. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全4冊(1985).
 32. スワヒリ語, 宮本正興ほか編, 全5冊(1985).
 33. 西南官話, 橋本萬太郎, 馬真ほか編, 全2冊(1986).
 34. タミル語, 山下博司ほか編, 全2冊(1986).
 35. ベンガル語, 溝上富夫ほか編, 全3冊(1986).
 36. 中原官話, 中嶋幹起, 賀巍ほか編, 1冊(1987).
 *37. タイ語, 森 幹男ほか編, 全4冊(1987).
 38. シンハラ語, 中村尚司ほか編, 全3冊(1987).
 39. インドネシア語, 森村 蕃ほか編, 全3冊(1988).
 *40. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全4冊(1988).
 *41. トルコ語, 林 徹ほか編, 全4冊(1988).
 42. ベンガル語, 奈良 毅編, 1冊(1989).
 43. ベトナム語, 栗原浩英ほか編, 全2冊(1989).
 44. アラビア語(エジプト方言), 藤井章吾ほか編, 全2冊(1989).
 45. 朝鮮語, 大江孝男編, 全3冊(1990).
 46. インドネシア語, 宮崎恒二ほか編, 全3冊(1990).
 *47. ペルシア語, 岡崎正孝, ハーシエム・ラジャブサーデ編, 全4冊(1990).
 *48. エストニア語, 松村一登編, 全2冊(1991).
 49. ビルマ語, 根本敬ほか編, 全3冊(1991).
 50. 中国語, 杉村博文, 古川裕編, 全4冊(1991).
 51. ネパール語, 石井 溥ほか編, 全3冊(1992).
 52. アラビア語(エジプト方言), 西尾哲夫ほか編, 全3冊(1992).
 *53. フィリピン語, ウィルフレド・ムヤルガス, 大上正直, 津田 守編, 全3冊(1992).
 54. 朝鮮語, 梅田博之編, 1冊(1993).
 55. グルジア語, 木下宗篤ほか編, 全2冊(1993).
 56. モンゴル語, 橋本勝ほか編, 全3冊(1993).
 資料1. スワヒリ語〈三日坊主コース〉テキスト, 守野庸雄編, 1冊(1985).

特定研究「言語」出版物

「文字と言語」研究資料

- *1. HASHIMOTO M.J., *hP'ags-pa Chinese*, 1978.
 2. 橋本萬太郎編, 東干語文字の音表化(資料集), 1978.
 *3. 橋本萬太郎編, ラテン化新文字(資料集), 1978.
 4. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(I), 1979.
 5. SCHAANK, Simon H., *The Lu-Feng Dialect of Hakka*, 1979.
 6. 吉田 忠, 蘭学における訳語の考察, 1980.
 7. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(II), 1980.

「AA諸言語と日本語の学習」資料

- *77-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語—朝鮮語1. 1978.

- *77-2. 大河内康憲：基本動詞対照用例集 日本語—中国語1. 1978.
- *77-3. 坂本 恭章：基本動詞対照用例集 日本語—タイ語1. 1978.
- *78-1. 梅田 博之：基本動詞対照用例集 日本語—朝鮮語2. 1979.
- *78-2. 大河内康憲：基本動詞対照用例集 日本語—中国語2. 1979.
- *78-5. 奈良 毅：基本動詞対照用例集 日本語—ヒンディー語1. 1979.
- *78-6. 内記 良一：基本動詞対照用例集 日本語—アラビア語1. 1979.
- *78-7. 守野 庸雄：基本動詞対照用例集 日本語—スワヒリ語1. 1979.
- *78-8. 梅田博之ほか：助詞対照用例集1：「の」日本語—AA諸言語, 1979.
- *79-1ab. 梅田博之ほか：日本語の発音(朝鮮語を母語とする学習者のための日本語発音教材試案), 1980.
- *79-3. 坂本 恭章：基本動詞対照用例集 日本語—タイ語2. 1980.
- *79-5. 奈良 毅：基本動詞対照用例集 日本語—ヒンディー語2. 1979.
- *79-6. 内記 良一：基本動詞対照用例集 日本語—アラビア語2. 1980.
- *79-7. 守野 庸雄：基本動詞対照用例集 日本語—スワヒリ語2. 1980.
- *79-8. 梅田博之ほか：AA諸言語教育基本語彙表, 1980.

共同研究プロジェクト報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究—中間報告, 1966.
アジア・アフリカ諸国国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票, 上(1966), *下(1967).
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos. *1(1968), *2(1969), *3(1970), *4(1971), *5(1972), *6(1973),
7(1982), 8・9(1986).
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos. 1(1970), 2(1971), 3(1972).
- *5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos. *1(1972), *2(1972), *3(1973).
6. アジア・アフリカ文法研究, Nos. *1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(1975), 5(1976), 6(1977), 7(1978),
8(1979), 9(1980), 10(1981), 11(1982), 12(1983), 13(1984), 14(1985), 15(1986), 16(1987),
17(1988), 18(1989), 19(1990), 20(1991), 21(1992).
7. *Asian and African Grammatical Manuals*(アジア・アフリカ文法便覧), 1972~:

<ul style="list-style-type: none"> No.*11. Korean(梅田博之), 1973. 11z. Sakhalin Ainu(木崎恭子), 1978. *12b. Fukienese(中嶋幹起), 1976. *12z. Tibetan(北村 甫), 1977. 13. Indo-Aryan(石垣幸雄), 1980. 13a. Hindi(溝上富夫), 1980. *13b. Marathi(内藤雅雄), 1976. 13c. Bengali(奈良 毅), 1979 13d. Khaling(鳥羽季義), 1979, 1984. 13e. Panjabi(溝上富夫), 1981. *13x. Tamil(徳永宗雄), 1981. 13y. Malayalam(伊藤正二), 1978. *14a. Cambodian(坂本恭章), 1974. *14b. Burmese(藪 司郎), 1974. 14c. Thai(森 幹男), 1975, 1984. *15b. Philippine(山田幸宏, 土田滋), 1975, 1983. *16b. Samoan(小田真弘), 1977. 	<ul style="list-style-type: none"> *17. Persian(上岡弘二), 1976. 17b. Baluchi(縄田鉄男), 1981. 17m. Mazandarani(縄田鉄男), 1984. 17p. Parachi(縄田鉄男), 1983. *17s. Shughni(縄田鉄男), 1980. *20. African(石垣幸雄), 1975. *21. Swahili(守野庸雄), 1976. *22a. Cushitic(石垣幸雄), 1972. 22b. Ethiopic(石垣幸雄), 1978. *23. Hausa(松下周二), 1974. *26. Fulfulde(江口一久), 1974. 33. Romance & Greek(石垣幸雄), 1973. 33y. Basque(石垣幸雄), 1979. 33z. Maltese(石垣幸雄), 1977. 34a. Albanian(石垣幸雄), 1979. *36. Uralic etc.(石垣幸雄), 1976. 40. USSR Major(石垣幸雄), 1980.
--	---
8. アフリカ部族社会の比較研究, 1. アフリカ部族社会の特質をめぐって(1971), *2. アフリカ社会の地域性(1973).
- *9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告, 1(1974).
10. アジア・アフリカ語の計数研究, *1(1975), *2(1975), *3(1976), *4(鄒 嘉彦, 老乞大諺解単字索引, 1976),
*5(坂本恭章, カンボジア語小辞典, 1976), *6(1976), *7(1977), *8(1978), *9(1978), *10(1979),
*11(1979), *12(YUE, Anne O., *The Teng-xian Dialect of Chinese*, 1979), *13(1980), *14(藍清漢, 中国語宜蘭方言語彙集, 1980), 15(SHERARD, Michael, *Synchronic Phonology of Modern Colloquial Shanghai*,
1980), 16(1981), *17(傅懋勳, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈上册〉, 1981), *18(徐琳・木玉璋, 僂
僂族《創世紀》研究, 1981), 19(1982), 20(SHERARD, Michael, *A Lexical Survey of the Shanghai Dialect*,
1982), *21(1983), *22(1984), 23(傅懋勳, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈下册〉, 1984),

- 24(1985), 25(ポール K. ベネディクト, 突破口: 東南アジアの言語から日本語へ—日の神の民の起源, 1985), 26(1986), *27(徐琳, 白族《黄氏女対経》研究, 1986), 28(1987), *29(徐琳, 白族《黄氏女対経》研究〈続〉, 1988), 30(1988).
- *11. *Oceanic Studies*, No.1 (1976).
- *12. インド・パキスタン分離独立の史的的研究 資料集, *1(1976), *2(1977).
13. 南アジアの大河流域における農村社会の研究; 南アジア農村社会の研究, *1(1977), *2(1978), 3(1979), 4(1979), *5(1980), 6(1985), *7(1987), 8(1987),
14. ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究: YAK, *1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1980), 5(1981), 6(1982), 7(1983), 8(1987),
15. アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語(1980).
16. 日本の言語文化研究リプリント・シリーズ, No.1(飯島 茂, 日本からみた “Thailand: A Loosely Structured Social System,” 1981), No.2(岡田英弘, 中国のなかの日本, 1982).
17. *Phraseological Questionnaire*, 石垣幸雄 Vol. 1, Nos.1~2 (*Aquatic Idiomatics*, 1982), Vol.3, No.1 (*Proverbial*, 1981).
18. *Performance in Culture*, No. 1 (BEEMAN, William O., *Culture, Performance and Communication in Iran*, 1982), *No. 2 (AWASTHI, Suresh, *Drama: The Gift of Gods—Culture, Performance and Communication in India*, 1983), *No. 3 (NAGASHIMA, Y. S., *Rastafarian Music in Contemporary Jamaica—A Study of Socioreligious Music of the Rastafarian Movement in Jamaica*, 1984), No. 4 (AND Metin, *Culture, Performance and Communication in Turkey*, 1987), No. 5 (OCHIAI, Kazuyasu, *Meanings Performed, Symbols Read: Anthropological Studies on Latin America*, 1989), No. 6 (RAZ, Jacob, *Aspects of Otherness in Japanese Culture*, 1992).
19. *Nationalism in Asia and Its International Relations*, No. 1 (*Transformation and Peasant Movements in Contemporary Asia*, 1985), No.2(アジア政治の展開と国際関係, 1986).
20. 象徴と世界観研究叢書, No. 1(高知尾 仁, 球体遊戯, 1986), No. 2(橋本裕之, 春日若宮おん祭と奈良のコスモロジー, 1986).
21. 南アジアにおける社会集団形成過程に関する比較研究, 1(柳沢 悠, 水島 司, 20世紀初め南インドにおけるカーストと土地保有構造の変動, 1988), 2 (KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Vijayanagar Rule in Tamil Country as Revealed Through a Statistical Study of Revenue Terms in Inscriptions*, 1988), 3 (KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Vijayanagar Rule in Tamil Country as Revealed Through a Statistical Study of Revenue Terms in Inscriptions*, Part two (Appendix III), 1989). 4(内藤雅雄編, 近現代南アジアにおける社会集団と社会変動, 1990).
- *22. 第三世界の大量文化の研究, 1(原 忠彦, インド・マンガの世界観序論, 1988).
23. 多民族国家における異化・同化形態の比較研究; マレーシア社会論集, *1(1988), 2(1989), 3(1993),
24. 多民族国家における異化・同化形態の比較研究: 水島 司, 18~20世紀南インド在地社会の研究, 1991.
25. A Comparative Study on the Modes of Inter-Action in Multi-Ethnic Societies: Monograph Series, 1 (FUJIMOTO, Helen; *The South Indian Muslim Community and the Evolution of the Jawi Peranakan in Penang up to 1948*, 1988).
26. AA研東南アジア研究, 1(世紀転換期における日本・フィリピン関係, 1989), 2(東南アジアのナショナリズムにおける都市と農村, 1991), 3(*Millenarianism in Asian History*, 1993).
27. イスラム圏における異文化接触のメカニズム—市の比較研究—, 1(1989), 2(1991).
28. 辞典編纂, 1(1989), 2(1990), 3(1991), 4(町田和彦, ヒンディー語逆引辞典, 1992), 5(坂本恭章, 奈良毅, B. P. マリック, ラビンドラナート・タゴールの詩「夢見る女」の使用頻度・文脈付語彙集).
29. 言語文化接触に関する研究, 1(1989), 2(侯 精一, 晋語平遙方言分類語彙, 1990), 3(杜拉爾, 敖斯爾・朝克, エウキ語基礎語彙集, 1991), 4(石明远, 山東省莒县方言, 1992), 5(中嶋幹起編, シンポジウム満州語の言語学的・文献学的研究, 6(中嶋幹起編, 調査報告「中国周辺部における言語接触と社会文化変容—漢族文化と非漢族文化との相互関係—」, 1993).
- *30. *Annual Report on CIIL-ILCAA Joint Research Project*, 1(1989), 2(1991), 3(1992), 4(1993).
- *31. アジア・アフリカ言語文化資料の情報処理に関する基礎的研究: 長田俊樹, *A Reference Grammar of Mundari*, 1992., 内田紀彦, *Studies in Dravidian Phonology*, 1993.
- *32. South Asians Abroad Series, 1 (KOGA Masanori, ed., *South Asian Community Organisations in East Africa, the United Kingdom, Canada & India*, 1992), 2(KOGA Masanori, HAMAGUCHI Tsuneo, NAITO Masao, eds., *South Asians in the United Kingdom, Tanzania and Canada*, 1992).
- *33. 東アジアの社会変容と国際環境: 佐々木揚, 東アジア史資料叢刊第一輯, 19世紀末におけるロシアと中国—『クラースヌィ・アルヒーフ』所収史料より, 1993.

外国人研究者出版物

1. CONSTANTINO, E., *Isinay Texts and Translations*, 1982.
2. EL-ARABY, S. A., *Intermediate Egyptian Arabic ; An Integrative Approach*, 1983.
3. 札奇斯欽, 我所知道的德王和當時的內蒙古(一), 1985.
4. 馬真ほか, 西南官話基本文型の記述, 1986.
5. DOWNS, J.F., *Tibetan Pilgrimage*, 1987.
6. 賀 巍, 漢語方言文稿集, 1987.
7. 李 榮, 渡江書十五音, 1987.
- *8. 侯 精一, 晉語研究, 1989.
9. 照那斯图, 八思巴字和蒙古語文獻 I, 研究文集, 1990.
10. 照那斯图, 八思巴字和蒙古語文獻 II, 文獻匯集, 1991.
11. Pan Hla, Nai, *The Significant Role of the Mon Version Dharmaśāstra*, 1991.
12. REID, L.A., *Guinaang Bontok Texts*, 1992.
13. VIETZE, H. -P. *Altan Tobči ; Text und Index*, 1992.
14. Pan Hla, Nai, *The Significant Role of the Mon Language and Culture in Southeast Asia*, Part I, 1992.
15. 札奇斯欽, 我所知道的德王和當時的內蒙古(二), 1993.

Studia Culturae Islamicae

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.
3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftlik) of the Notables in Western Anatolia*, 1976.
5. MIYAJI, K., "Kaçem Ali" — *Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.
6. MIYAJI, M., *L'émigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.
7. MIKI, W. & Abd al-Raḥīm, *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan ; A Comparative Study*, 1977.
8. M. Salah Ahmed, HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in the Middle East*, 1979.
9. 上岡弘二, 家島彦一, インド洋西海域における地域間交流の構造と機能—ダウ調査報告2, 1979.
- *10. KAMIOKA, K., & YAMADA, M., *Lārī Basic Vocabulary ; Lārestānī Studies 1*, 1979.
11. NAGATA, Y., *Materials on the Bosnian Notables*, 1979.
12. SHIMIZU, K., *Bibliography on Saljuq Studies*, 1979.
13. HANEDA, K., *Tabrizi Vocabulary ; an Azeri-Turkish Dialect in Iran*, 1979.
14. NAKANO, A., *Report on Moroccan Urban and Rural Life 1 ; Ethnographic Texts in Moroccan Arabic*, 1979.
15. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (1)*, 1982.
16. YAJIMA, H., *Hasan Tāj al-Dīn's The Islamic History of the Maldiv Islands (D. 1139 A. H. / 1727 A. D.)*, Vol. 1 (Arabic Text), 1982.
17. NAKANO, A., *Somali Folktales (1) ; Texts in Somali [1]*, 1982.
18. NAKANO, A., *Folktales of Lower Egypt (1) ; Texts in Egyptian Arabic [1]*, 1982.
19. BELLAKHADARI, J., HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in the Maghrib*, 1982.
20. YAMAGATA, T., *Coptic Monasteries at Wadi al Natrun in Egypt—From the Field Notes on the Coptic Monks' Life—*, 1983.
21. BAYKARA, T., *Yatağan—Her Şeyi İle 'Tarihi Yaşatma Denemesi'—*, 1984.
22. YAJIMA, H., *Hasan Tāj al-Dīn's The Islamic History of the Maldiv Islands*, Vol. 2(Annotations and Indices), 1984.
23. NAGHIZADEH, M., *The Role of Farmer's Self-Determination, Collective Action and Cooperatives in Agricultural Development ; A Case Study of Iran*, 1984.
24. ABDULSALAM, A., *The Rural Geographic Environment of the Syrian Coastal Region and the Shizuoka Region ; A Comparative Study of Syria and Japan*, 1985.
25. ABDULSALAM, A., *Adighean (Western Circassian) Vocabulary*, 1985.
26. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (2)*, 1985.
27. BAŞER, K., HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Turkey*, 1986.
28. USMANGHANI, K., HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Pakistan*, 1986.

29. NAKANO, A., *Comparative Vocabulary of Southern Arabic (Mahri, Gibbali and Soqotri)*, 1986.
- *30. KAMIOKA, K., RAHBAR, A. & HAMIDI, A. A.; *Comparative Basic Vocabulary of Khonjī and Lārī; Lārestān Studies 2*, 1986.
31. 家島彦一, Arwād島—シリア海岸の海上文化—, 1986.
32. TAKESHITA, M., *Ibn 'Arabī's Theory of the Perfect Man and Its Place in the History of Islamic Thought*, 1987.
33. HAYASI, T., *A Turkish Dialect in North-Western Anatolia; Bolu Dialect Materials*, 1988.
34. PARSINEJAD, I., *Mirza Fath Ali Akhundzadeh and Literary Criticism*, 1988.
35. SATO, T., *The Syrian Coastal Town of Jabala—Its History and Present Situation*, 1988.
- *36. 家島彦一, 上岡弘二, イラン・サグロス山脈越えのキャラバン・ルート, *IRANIAN STUDIES 1*, 1988.
- *37. 上岡弘二, 羽田亨一, 家島彦一, ギーラーンの定期市—1986年度予備調査報告—, *IRANIAN STUDIES 2*, 1988.
38. HAKAMI, N., *Pēlerinage de l'Emām Rezā; Étude Socio-économiques*, 1989.
- *39. HONDA, G., MIKI, W. & SAITO M., *Herb Drugs and Herbalists in Syria and North Yemen*, 1990.
40. OHTA, K., *The History of Aleppo; Known as ad-Durr al-Muntakhab by Ibn ash-Shiḥna*, 1990.
41. Raouf Abbas Hamed, *The Japanese and Egyptian Enlightenment; A Comparative Study of Fukuzawa Yukichi and Rifā'ah al-Taḥṭāwi*, 1990.
42. YAMAUCHI, M., *The Green Crescent under the Red Star; Enver Pasha in Soviet Russia 1919-1922*, 1991.
- *43. NISHIO, T., *A Basic Vocabulary of the Bedouin Arabic Dialect of the Jbāli Tribe (Southern Sinai); Studia Sinaitica I*, 1992.
- *44. 日高英實, イラン現代政治年表 I: 1946年3月-1949年3月, *IRANIAN STUDIES 3*, 1992
- *45. 日高英實, イラン現代政治年表 II: 1949年3月-1952年3月, *IRANIAN STUDIES 4*, 1993.
- *46. YAMAUCHI, K., *The Vocabulary of Sasanian Seals*, *IRANIAN STUDIES 5*, 1993.
47. 日高英實, イラン現代政治年表 III: 1952年3月-1952年9月, *IRANIAN STUDIES 6*, 1993.

African Languages and Ethnography

1. EGUCHI, P. K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.
- *2. MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1975.
3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls Férōsé du Diamaré; Maroua et Pétté*, 1976.
4. EGUCHI, P. K. (tr.), *Shī'r al-Tūba (Poem of Repentance)*, 1976.
5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw Folktales in Tanzania)*, 1976.
6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.
7. TANAKA, J., *A San Vocabulary of the Central Kalahari-G//ana and G/wi Dialects*, 1978.
8. MOHAMMADOU, E., *Les Royaumes Foulōé du Plateau de l'Adamaoua au XIX^e siècle*, 1978.
9. MATSUSHITA, S., *In a Small Town on the Benue-Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*, 1978.
10. HINO, S., *The Classified Vocabulary of the Mbum Language in Mbang Mboum—with Ethnographical Descriptions*, 1978.
11. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon I*, 1978.
12. MOHAMMADOU, E., *Catalogue des Archives Coloniales Allemandes du Cameroun*, 1978.
13. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon II*, 1980.
14. MOHAMMADOU, E., *Le Royaume du Wandala ou Mandara au XIX^e siècle*, 1982.
15. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon III*, 1982.
16. NAKANO, A., *A Vocabulary of Beni Amer Dialect of Tigré*, 1982.
17. MOHAMMADOU, E., *Peuples et Royaumes du Foubina*, 1983.
18. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon IV*, 1984.
19. KAJI, S., *Deux Mille Phrases de Swahili Tel Qu'il Se Parle au Zaïre*, 1985.
20. MOHAMMADOU, E., *Traditions d'Origine des Peuples du Centre et de L'ouest du Cameroun*, 1986.
21. EGUCHI, P. K., *An English-Fulfulde Dictionary*, 1986.
22. MOHAMMADOU, E., *Les Lamidats du Diamaré et du Mayo-Louti au XIX^e siècle*, 1988.
23. MOHAMMADOU, E., *Traditions Historiques des Peuples du Cameroun Central Vol.1*, 1990.
24. MOHAMMADOU, E., *Traditions Historiques des Peuples du Cameroun Central Vol.2*, 1991.
25. KIMURA, E., *Mabadiliko ya Kijamii Na Riwaya ya Upelelezi Tanzania (Social Changes and Detective Novels of Tanzania)*, 1992.

- *26. KAJI, S., *Vocabulaire Lingala Classifié*, 1992.

Sudan Sahel Studies

1. TOMIKAWA, M. (ed.), 1984.
2. TOMIKAWA, M. (ed.), 1986.

African Urban Studies

1. HINO, S. (ed.), 1990.
2. HINO, S. (ed.), 1992.
3. HINO, S. (ed.), 1993.

Bantu Vocabulary Series

1. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Mwenyi Language*, 1987.
2. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Nkoya Language*, 1987.
3. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Lungu Language*, 1987.
4. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Lenje Language*, 1987.
5. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Nilamba Language*, 1989.
6. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Pare Language*, 1989.
7. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Luba Language*, 1992.
8. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Bakueri Language*, 1992.
9. NAKAGAWA, H., *A Classified Vocabulary of the Ha Language*, 1992.
10. BESHA, R. M., *A Classified Vocabulary of the Shambala Language with Outline Grammar*, 1993.

Bantu Linguistics (ILCAA)

1. *Studies in Zambian Languages*, 1987.
2. *Studies in Tanzanian Languages*, 1989.
3. *Studies in Cameroonian and Zairean Languages*, 1992.

Boucle du Niger—Approches multidisciplinaire—

1. KAWADA, J. (ed.), 1988.
2. KAWADA, J. (ed.), 1990.
3. KAWADA, J. (ed.), 1992.

ILCAA African Literature Series

1. WUFELA, YAEK'OLINGO, André : *Littérature et Politique en Afrique Noire ; Regards diachroniques sur le concept de l'engagement politique de l'écrivain dans la littérature africaine de langue française*, 1992.
2. WUFELA, YAEK'OLINGO, André : *Littérature Africaine et Christianisation de l'Afrique Noire ; La conversion au christianisme-obstacles et motivations-dans la littérature africaine de langue française et anglaise*, 1992.
3. WUFELA, YAEK'OLINGO, André, : *A la Recherche d'une Identité ; Littératures, langues et recherche scientifique face au processus du développement au Zaïre*, 1992.
4. WUFELA, YAEK'OLINGO, André & SHEMBO SHEKA, Francine : *Cent Ans de Recherche sur le Peuple M'ngɔ ; Regards rétrospectifs et prospectifs suivis d'une bibliographie chronologique et sélective*, 1992.

Monumenta Serindica

1. IJIMA, S., (ed.), *Changing Aspects of Modern Nepal ; Relating to the Ecology, Agriculture and Her People*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. J. (compl.), *The Newari Language ; A Classified Lexicon of Its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H. (ed.), *Glo Skad ; A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas*, 1977.
4. MATISOFF, J. A., *Mpi and Lolo-Burmese Microlinguistics*, 1978.
5. HOSHI, M. & Tondup Tsering, *Zangskar Vocabulary ; A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*, 1978.

6. KITAMURA, H., NISHIDA, T. & NISHI, Y. (eds.), *Tibeto-Burman Studies 1*, 1979.
7. NAGANO, Y., *Amdo Sherpa Dialect ; A Material for Tibetan Dialectology*, 1980.
8. NISHIDA, T., *The Structure of the Hsi-hsia (Tangut) Characters*, 1980.
9. THURGOOD, G., *Notes on the Origins of Burmese Creaky Tone*, 1981.
10. BISTA, D. B., IJIMA, S., ISHII, H., NAGANO, Y. & NISHI, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*, 1982.
11. KARAN, P. P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Map ; The Kingdom of Nepal*, 1983.
12. TACHIKAWA, M., MIKAME, K., HOSHI, M. & NAGANO, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal II*, 1984.
13. KARAN, P. P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Sikkim Himalaya -Development in Mountain Environment*, 1984.
14. MALLA, K. P., *The Newari Language ; A Working Outline*, 1985.
15. ISHII, H., TACHIKAWA, M., NAKAZAWA, S., NAGANO, Y. & HOSHI, M., *Anthropological and Linguistic Studies of the Kathmandu Valley and the Gandaki Area in Nepal*, 1986.
- 15a. SHARMA, P. R., 三瓶清朝, 山本勇次, ネパールにおける言語・文化・社会の動態, 1986.
16. SUN, J. T. S., *Aspects of the Phonology of Amdo Tibetan : Ndzorge Sæme Xyra Dialect*, 1986.
17. KARAN, P. P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Bhutan : Development amid Environmental and Cultural Preservation*, 1987.
18. EINO, S., *Die Cāturmāsya oder die altindischen Tertialopfer dargestellt nach den Vorschriften der Brāhmaṇas und der Śrautasūtras*, 1988.
19. SUWA, T., *Two Essays on the Formation of the East Asian Ethnic World*, 1989.
20. FINCHER, J. H., *Chinese Democracy ; Statist Reform, The Self-Government Movement and Republican Revolution*, 1989.
21. SEKINE, Y., *Theories of Pollution ; Theoretical Perspective and Practice in a South Indian Tamil Village*, 1989.
22. SHIMA, I., *A Newar Buddhist Temple Mantrasiddhi Mahāvihāra and a Photographic Presentation of Gurumandalapūjā*, 1991.
23. 石井 博(編), ネパール語彙集, 1993.

Studies in Socio-Cultural Change in Rural Villages in India

1. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Land Control and Social Change in the Lower Kaveri Valley from the 12th to 17th Centuries*, 1980.
2. HARA, T. & KOMOGUCHI, Y., *Socio-Economic Studies of Two Villages ; Esanokorai and Peruwalanallur, Lalgudi Taluk*, 1981.
3. 柳沢 悠, 南インド・カーヴェリ河流域の農村社会の史的变化—アパドゥライ村の土地所有関係を中心に—, 1981.
4. SUBBIAH, S., MIZUSHIMA, T. & NARA, T., *Socio-Economic Studies of Two Villages ; Mahizambadi and Neykulam, Lalgudi Taluk*, 1981.
5. NAKAMURA, H., *Disintegration and Re-integration of a Rural Society in the Process of Economic Development ; The Second Survey of a Tank-based Village in Tamil Nadu*, 1982.

Socio-Cultural Change in Villages in India

- *1. KARASHIMA, N., *Pre-modern Period*, 1983
- *2. *Modern Period* No.1 (HARA, T., MIZUSHIMA, T. & NAKAMURA, H.), No.2 (YANAGISAWA, H.), 1983.
No.3 (KOMOGUCHI, Y.), 1984.

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in Bangladesh

1. HARA, T. & UIMITSU, M., 1985.
2. FAROUK, A., 1985.
- *3. TANIGUCHI, S. & SATO, H., 1985.
4. ISLAM, S., 1985.
5. CHOWDHURY, A., 1987.
6. TANIGUCHI, S., 1987.
7. SATOH, T. & UIMITSU, M., 1987.
8. FAROUK, A., 1987.
9. MOHSIN, K. M., 1990.

South Asian Monograph

- *1. KAWAI, A., *'Landlords' and Imperial Rule: Change in Bengal Agrarian Society c.1885-1940*, Vol. 1, 1986, Vol. 2, 1987.
2. 水島 司, 南インド在地社会の研究, 1987.

AA-Ken Caribbean Study Series

1. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (eds.), *Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, Vol. 1, 1985.
2. VERNON, D., *Money Magic in a Modernizing Maroon Society*, 1985.
3. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (eds.), *Social and Festive Space in the Caribbean: Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, Vol. 2, 1987.

一般研究出版物

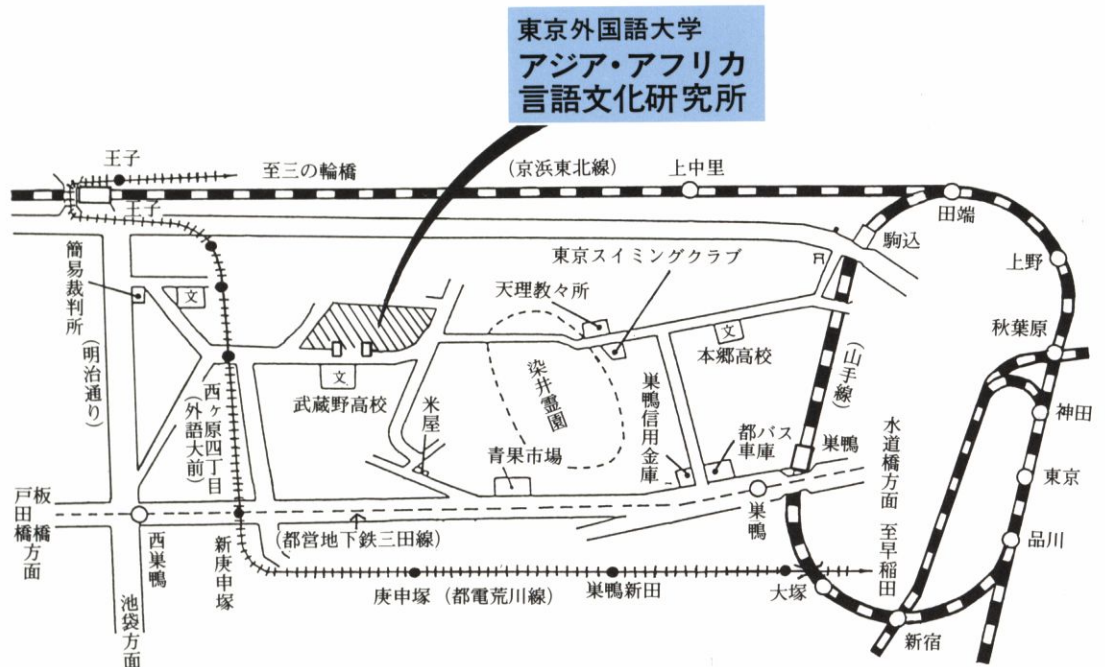
1. 湯川恭敏, サンバー語動詞のアクセント, 1983.
2. Bargery Toolbox 2 (MATSUSHITA, S., *Based Rev. G. P. Bargery's A Hausa-English Dictionary*, 1993).

コンピュータ マニュアル シリーズ

1. VSAMEDIT (テキストエディター) 松下周二 (1984).
 - *2. FONTMAKER (文字フォント作製・修正) 今井健二 (1985).
 3. BUNPOO (文法: 文字コード変換) 今井健二 (1982).
 4. AAFE (文字フォントエディタ) 今井健二 (1985) [廃版]
 5. AATEDIT (各種言語テキストエディタ) 今井健二 (1985) [廃版]
 6. 辞書検索表示プログラム 松下周二 (1986).
 7. TEDIT (フルスクリーンテキストエディタ) 今井健二 (1990).
 8. 電子辞書DICSEARCH 松下周二 (1992).
- 別冊 文字フォントリスト1 (1993), 2 (1988), 3 (1992), 4 (1991).

アジア・アフリカ言語データシリーズ

1. 坂本恭章編, 近世アンコール碑文-KWIC索引, 1986.
2. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series-Bengali Language (1)*, 1987.
3. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series-Bengali Language (2)*, 1988.
4. SAKAMOTO, Y., *Austro-Asiatic Series-Khmer (2)* CBAP SREI, 1989.
- *5. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series-Bengali Language (3)*, 1991.



(交通機関)

1. JR山手線大塚駅で下車し、都電(荒川線)三の輪橋方面に乗って四つ目の西ヶ原4丁目(外語大前)から徒歩3分。又はJR京浜東北線王子駅で下車し、都電(荒川線)早稲田方面に乗って三つ目の西ヶ原4丁目(外語大前)から徒歩3分。
2. 都営地下鉄三田線西巣鴨駅下車、徒歩10分。
3. JR山手線巣鴨駅又は駒込駅下車、徒歩15分。
4. JR京浜東北線王子駅南口下車、徒歩20分。

アジア・アフリカ言語文化研究所 東京外国語大学

〒114東京都北区西ヶ原4丁目51番21号
TEL 03-3917-6111 (代)
FAX 03-35974-3838

